

るとの歌など知りませぬか、

千里姫には今は只ならぬ御身のよし、あつばれ男子誕生あれかすと、心に願はぬ時ぞなき又妾も御尋ね申し親しく御話しも申度けれど、殿の御思召も如何あらんと差控へ居るものを、若し男子出生ありなば妾は、養ひ育てて殿の御代繼と仰がせて、千里姫諸共に老ひの樂みを期せんとして祈らぬ社もなきものを、其の妾の心も知らず、扱てく御身達は憂たてき心やな、と云ひ捨て立て奥の間に入る、四人の女は顔見合せ、驚き入たる奥方様の御見暮、扱て此の上の御思案はと三人爪木に詰め寄る、

爪木、沈黙考し居りしが、最早此上は是非に及ばず、皆に近うと、集り耳話する、櫻木すりや寶藏に忍び入り、彼の山鳩の寶劍を『シツ』と爪木が叱るして淺茅殿には御乳父の中村勇太早足に急ぎの御用ありとくたく出仕申付けませへ、淺茅、忝りました、と褻取急ぎて彼方に行く、

櫻木岩戸は寶藏に忍び入る仕度して去る、爪木一人思案を凝らす、待遠しげに此隙に、今宵の様子を權藤太にさうじやくと燈下に筆紙を運びて手紙を書く、書き終る頃に櫻木岩戸兩人、寶劍を竊かに盗み來り、御局様と手渡さんとする、爪木『シツ』と靜かにく答へて受取る、

岩戸は淺茅殿は未戻だりませぬかと問ふ、

櫻木火急の御用と申付けたるなればもう參りそうなものや、と言葉終らぬに淺茅早足を伴ひ出て來る、

爪木、早足殿には御早い御出仕、

早足、して其の火急の御用とは、

「爰にて舞臺半廻りとなり庭の四阿の所へ爪木早足を誘ひ來る」

爪木、夜中急ぎの御用とは奥方様の一大事御身ならでは叶わぬ御用、秘密の大事に御座りますれば御他言は勿論御無用若し此の御用、を仕損じなば奥方様は勿論御身

も私も一命にかゝはる事、とくと御心を静め御聞かれなされ、其れに付け奥方様の御仰せに背かぬ、違はぬ、この御誓言が承りたし、主君の御爲めで御座りまするぞ、早足、事新らしき御事かな、姫君御出生の時より片時も離れず御奉公なせし此の早足、そも何程の御大事なればとて左様に御心を置かる可き仔細なし、去れど兎も角、如何にも誓言仕る、當國の靈社香推箱崎住吉安樂寺の聖廟をかけ奉りて、御望みのこと決して違背致すまじ、と答ふ、

爪木、忝き御志よ嚙奥方様にも御満足、御願望成就も疑ひなし、其れにて我身も少しは安堵、早足、御念にや及ぶ可き、して其の御用命とは、爪木、そもく吾君様の御願ひとは苜萱御所の千里姫を早足に命じて人知れず失ひ得させよとの御誂、早足、聞て「エ、」と驚き今更の思ひをなし切齒扼腕す、

爪木、其の驚きは尤もながら、吾君には御嫉妬の御心激しく取り昇せ給ひ夜も碌々休み給はず、御食事さへ常ならず、仰せらるゝ様は、殿には九州探題筑紫の守護と

して身柄あるまじき御不行籍、日夜うつゝに心を奪はるゝは、妾は守護家の室として看捨難き所之を失ふは御家御安泰の爲め土地、民の爲めなれば、是非にも小の蟲を殺して大の蟲を援くるの道ならずや、此事は早足ならでは仕とげ難しと思ひ切たる御氣色、妾も御側に侍る局として様々に御諫言申せしなれど、其方まで妾が申付に違くなら直に里方原田家へ引上げ屹と覺悟ある可きぞとの、御嚴命に御座りまする、

早足、一應伺ひましたるなれど如何しても、奥方様御本心の御沙汰とは存られずはて訝かしき事よなふ、して其れには何か確なる吾君様の證據が御座るか、

爪木、北叟えみて、ほゝ是れ程の大事證據なくや叶ふ可き、之れを御覽せよ、と寶劍を示す、吾君様の仰には若しも早足妾の命にあらずと疑ひなば之れを出し見せよとのこと抑も此の刀は如何なる仔細のある物か、

早足、今まではよもや奥方様の御意にはあらじと思ひしに、此の御刀を見て疑ひ全く

解け申した、此の山鳩の劍こそ御守刀にして節刀に均しきもの、斯くなる上は是非に及ばず承引仕て御座りまする、と刀を受取り天を仰で嘆息の思入れをなし、

(幕)

第 三 幕

第一齣 漆川堂堤の場

「日暮方宵月出て物淋敷場面

花道より勇太早足出て來り七三に停り」

早足、罪なき人を害すれば、桂子様の御方に報ひあるべきは必常、漢の呂后、梁郗后嫉妬によりて之を毀ふためし尠からず、殊更千里姫様には、繁氏公の御種を宿し給ふと聞き、一時の腹立ちに取り返しのかね後悔あるに相違なし、此れは何とかして助け度ものだな、思案に餘る此の難題如何致したら宜しかろうか？

「本舞臺に歩み來りふと堤側を見れば歳二十許の眉目優ぐれ品格よき落ぶれたる婦人四、五歳位の幼童を抱へ觀世音普門品を讀誦し、往來の人の憐み惠みを求め居るも、袖にすがりて物を乞ふ事はせず、つゝましかかな非人あり、往き來の人共彼の女の艶かなる姿を見て彼れ是れ言ひ寄るに、毎々迷惑し一向應對もせず、伏し目に拒み居るを好きことにして、人々此れを手を込めにせんとするを、勇太早足遙かに見て走り來て、男共を懲らし女を扶け懷中より金錢を取り出し之れを與へて、夕方の空にもなり、はや物乞も女の身には心元なし早々棲み家へ歸られよかし、女非人、厚き情の禮を述ぶる、其様子を早足熟ら々々望見てふと心に思ひ當る思入あつて、早足是れぞ天の與へ、たとへ吾手に掛けずとも飢寒に迫て死する命、千里姫様の御身更りに、と獨うなづき側近くに寄り添へ、

早足、如何に女、其方は何處の者か、

女非人、幼い時より此地に住みて乞食致し居りますれば何者の果か存じませぬ、

早足、いや／＼女よ包み隠すことなかれ、人品人柄容姿を見ても、元からの非人にてあらざるは争ふも益なきこと、歳は幾つ名は何んと、

女非人、御尋ねに預り申はべらんとすれば、先づ前き立つは、涙にて斯く落ぶれては有れど、元とは名ある者の娘、都に育ち此の國へ主君に従て來りはべる、然るに主君は任の内に病み、みまかり死し給ひ、家繼ぎ給ふ男子なく、姫君一方ましませど盛衰に従ふ世の習ひ、日々に仕へる者共の離れ離れに散り失せて、御乳人の者と自ら計り残り止まり申せしが、貧苦に迫り餘儀なくも、自らも御暇を給はり力なく立出でしが、右も左も知らぬ火の、筑紫の旅の頼りなく、此こよ彼しことさまよう中、玉田與三次清忠と云ふ者の言葉巧みに誘われて、連立つ家に行き見れば、其清忠には妻や子あり、情も知らぬ清忠は罪なき妻を追ひ出し、古里へ歸れとの酷き仕方、去れど子を思ふは親心、夜な夜な忍び來て吾が子に乳を吞ませ、或雪の夜に戸の外に佇すみしが、妾は清忠の眠るを待て戸を開くれば雪に

凍へて相はてぬ、妾も悲み泣く聲に、清忠立出で來て見れば無慘の最後に悔ひたるか、取り上せたるかは知らねども、其儘行衛も白波の、跡に残りし清忠の老母と此の子を置去りて途方に暮れし妾が身上、路頭に迷ふ乞食も、老ひたる母や此の子をば、養ふ爲めの餘儀なきなりはい、死ぬに死ぬぬ不幸の有様如何なる前世の宿縁か、其の罪障消滅や、無き清忠の妻の菩提を弔ふ爲め、此の普門品を讀誦して後生を願ひ居りまする、と首を垂れ泣き沈む、

「早足は其の襟足の白き頸を一刀の下にと思へども、餘りの憐はれさに斬り兼ねて涙を催し、勇氣も挫け溜め息ついてどつかと坐し、此は一層欺き殺さんよりは因果を含めなば聞き入れぬ事もなさうな賢き女と心にうなづき、

早足、扱ても／＼もあつばれの賢女かな、老たる母と其の子をば若し安樂に養はゞ、其方は吾が望みに任するか、

女非人、仰せまでもなし、其故にこそ人々に、面を晒らし恥を忍ぶの道の邊に、惜し

からぬ命ち長がらへて、あぢきなき世を送るはかなさ、老母の最後を見届け此の子を出家せしめし後は、新ら身の刀の試めしに成らうとて露程も惜まぬ命なれど、只だ妻や妾と呼べる、事は假令へ高位財寶に厭き満るとも其儀は眞平御斷り申しまする、

早足、誠に清廉潔白の御心世にも稀れなる貞節の御身感心仕て御座る、然らば拙者が心實を明し申さん、某は當國博多の守護職加藤左衛門繁氏の北の方桂子殿に仕へ申す中村勇太早足と云ふ者なるが、繁氏公の愛し給ふ千里姫を討ち果す可きを某に命じ給ふ

女非人、何んと仰せ候か其の千里姫こそ若し城の山入道尙光殿の息女にてはあらずやそは妾の主君にてはべる、

早足、や、左様にてありつるか扱ても不思議の因縁や、某し千里姫様を討て參らすこと御不憫に存する餘り實は御身の人品容姿の勝ぐれたるを見て御身代りに斬らん

の心底、

女非人、扱ても淺ましき此の身をば姫君の御身代に成されんとは冥加に餘る身の幸せ、早足、仰せにや及ぶ誠に難有き御承引いざ人の見とがめぬ内にと身構へすれば、女非人、此の期に及んで未練はなけれど、老へたる母と此の子をば吳々御頼み申まする、

早足、云ふまでもなし老母は某が母となし此子は身共が子となして出家せしむるに相違なし、

女非人、忝けなふ御座りまする、と手を合せ南無阿彌陀佛の聲共に美しき若き女の首は前に落つる

(幕)

第二齣 苜萱古御所千里姫居間

中村勇太早足善内兵衛介保二人下手より駈け出て姫上御免くと聲を掛け入來る千里姫、立出てあはたゞしく何事なるぞ、介保火急に候へば詳かに申上ませぬが、

一刻も早く此の御所を御立退きあつて、箱崎より商人船に召して、播磨國明石の浦に到らせ給へ、彼の所には介保が妻の兄井口嘉平太と申す者の候へば、彼れを御頼みあつて、暫く御忍びおはしませ、御供には介保が妻雲井を召連れ給ひ候へ彼れは男にも勝りたる甲斐／＼しき者に候へば、御心安く思召し給へ、して船中には西國巡禮の者と仰せられ、繁氏公と再び御對面あるまでは必ず御身を大切に御守り、御産目出度遊され候へ、事の仔細は跡にて相知れ申さん、かく申す間も心元なし、

雲井、御用意萬端整ひまして御座ります、いざ御出御待申上まする、

千里姫は、茫然夢心地にて先づ仔細を聞てこそ兎も角もなりなん、如何なる事か話し聞かせよ

早足、小脇に抱きし白綾小袖に包みたる女の首を出して千萬言よりも此の首を御覽あれと一部始終を物語る、

千里姫、や、此は彌生なり變りはてたる不思議の對面、あらなつかしやと首を抱て泣く、

早足、介保は、姫の出達を急ぎ立つ、

幕廻る

第二齣 の續き千里姫寢所

介保先きに立て早足を伴ひ來り、

介保、御邊の御厚志なくば何を以てか姫君の御一命を保ち得ん、此の上の計略は彌生の死骸を姫君の閨の中に入れ置き、何者の仕業とも知れざる態に爲し置きたれば御身は急ぎ首を携へ、博多の館に參り爪木に示されたし、疾く／＼とせき立て趣かしめ、介保は一人其の責を負て其場に遺書して、賊忍入り姫の首打たれたる顛末を記し自殺する

(幕)

第四幕 博多加藤館望春亭

「頃は仁平二年彌生中頃、繁氏は妻室桂子と望春亭に遊宴し詩歌の連詠糸竹の調べに興酣」

繁氏、いつぞや御身當國の歌枕を見まほしと望みし由、優しき所望、速に同道見せ參らせんなれど、政事繁多にして今に心に任さず其の義に及ばぬは本意ならず、何れの日か好き折を得て國中を見せ參らせん、茲に父君繁昌公當國下向の昔へ、地理わきまへ知らん爲め千脇源太左衛門を供とし、當國を廻り歩き給ひ、橋本嘉心をして悉く書き記さしめたる畫帖寶藏に收め置きたるが、今日此にて見せ參らすべし、歌人居ながらに名所を知るとは此の事とくと見候へよ、と帖を示し一々説き明しおる、追々と物語進みて濡衣姫の古跡の處に到て憐れな卷をながめ、

繁氏、嗚呼汝等かまへて常住の思ひに歡樂に耽り、會者の心ある可からずと云へば、桂子、誠に仰せの通りにはべる斯く定めなき世に在りながら女は別けて無常迅速なるもの、粉黛を粧ひ美色を飾り絃歌の淫聲に男の心を融かす罪深き身にてこそ候へ

猶其の上にも人の愛を奪ひ嫉妬の心を起し終には身を亡ぼすとは實になげかはしき事に御座りまする、

「満座一同ひつそりして物音もなく」

岩瀬局、進み出て、御二方様の仰せ、吾々如き心なき耳にさへ感じ入りまして御座りまする、去りながら何とやらん御説教の御法談を承り候様に頻りに無常を觀じまして、御酒宴の席とも御覺へ候はず打ち濕りて忌はしげに見えますれば、殿様には此程より御政務の御疲れ今日偶ま／＼の御遊興なれば、斯く斗り物固きも宜敷からず、殿様御愛樹の櫻、彼の李夫人の木下に御席を移され、御盃を改め御興遊ばさる可し、して皆々にも歌舞音曲を奏て御慰め申上る可し、

桂子、妾としたことが餘り話に理が積みて、誠に申譯が御座りませぬ、岩瀬好い處に心付きました殿様にも左様遊ばしませ、

繁氏、然らば席を更すると致そう、

幕廻る

其二齣 加藤館廣庭

「李夫人と申す大櫻樹の下に幔幕を張り花見の宴を開く」

繁氏、岩瀬其方一指し舞ひ候へ、

岩瀬、畏りました不手際なれと之れも當然の御慰み、(舞)

桂子、盃を取りて繁氏に進め、誠に局の計ひにあらずば今日の御宴も何となく興なき風情なりしに、能く取り斗ひ暮れました、殿にも一獻きこしめし遊ばせ、と跳子を女中より受取りて酒を注ぐ、

繁氏、實に尤も、局が働き能くそ出来かした、李夫人の花の影一潮の春の興をお覺實に感じ入た、料紙硯箱を取寄せ、

山櫻また一花を散らぬ間は心のよそに聞く嵐かな

丹尺を岩瀬に與へ岩瀬は吟詠す、

繁氏自ら料紙を桂子に進め御、身も一首詠せられよと命ずるを、桂子不つゝかな

がらと筆執りて、

數ならぬ身をも忘れて木の下、花に馴れぬる春の夕ぐれ

と詠じて繁氏に差出す、繁氏之れを吟詠す、

繁氏、之れは當座の褒美なるぞ、と自分と桂子の歌に席上にある香翁を岩瀬に與ふ、

岩瀬、恐れ入りまして御座ります難有頂戴仕りますと納む、

繁氏「盃を執て飲まんとすれば蕾の櫻の花房一つ盃中に落つる之れを繁氏ちつと見て桂子に向ひ」其方見すや、此の花未だ開かずして落ち散る、我等人間歳若くして老たるに先き立つ如し、惜まれる時散りてこそ世の中の花にこそ、繁氏歳未だ若きに家の繁榮に誇りて世の常なきを忘れ、色香を愛で酒を好み後ちの世を思わざる淺ましさを佛神の戒め給ふと覺へたり、浮き世の中の夢心誠の道を忘れてや有る可きぞ、今日の酒宴も是れまでぞ」と席を立たんとす時に

爪木「物蔭に潜み居りしが、急ぎあはたゞしく走り出て大息ついて申には」

爪木、自ら今日の御酒宴に、御供致さず候ひしはゆゝしき大事出来なし何とぞ殿に告げ奉り度、病氣と詐り心を碎きこゝや彼しここにたゝすみ隙を窺ひ待へりしが、扱てもく吾君桂子様には如何なる天魔の魅入り給ひ候か、彼の苜萱の御所にまします千里姫様の御事を朝け暮れ御憤ふりあつて、昨夜乳人の勇太早足に申し付けられ、あへなく姫君を討たせ給ふて、何者の所業とも知れざる様に計ひ、今日の御酒宴にも去りげなき御風情實に恐ろしとも嘆かはしとも申すに譬へん様もなし誠に殿様を御恨み遊ばす御心底決して御油断ある可からず、桂子は驚愕一同驚き膽を消す、

繁氏、大に驚き且つ怒りこは思ひ懸なき珍事、今更何んと詮術べもなき事ながら、桂子に於て左様の残忍の行ひあるべしとも思はれず、果て不審議、

爪木、殿様には其の疑ひは御尤なれど是れぞ何よりの證據に御座りませぬ、と、千里姫が所持なせし守本尊の厨子を開き、

爪木、吾君桂子様には千里姫の御顔御存じなき爲め彼れが首を討ち取るとも證據なくては相叶すとの御仰に従ひ、早足は御首と共に此の守本尊、其れを吾君見給ひて實に此の扉の歌は吾歌道の師範たる吳入道の手跡今は疑ふ所なし首諸共に何地へなりとも埋めよとて自らに給はりしを御首は早足に渡し、此の厨子は後日の證據と、密かに自ら携へて御覽に入れ候、實に口惜しきことに御座ります、

繁氏、厨子の扉を眺め讀み下して、

いつまでもと思ふ心も初瀬山、尾上の鐘のあはれ世の中

まがふ方なき千里の本尊、爪木其方此事は暫し人には沙汰するなよ、吾れ思ふ仔細もあれば、爪木は仕満したりと竊かに悦び其の場を去る、

繁氏、太刀をお取り斯く斗り不所存者とは思はざりしに其方を切り捨て、早足を成敗ばいせんと立上る、

桂子、身に覺へなき此の場の難儀、たとへ命は召さるゝとも心疚しき事としては露程も

なし實に恐る可きは人の心かなと、落膽する、

繁氏、屹と思ひ直し、斯かる騒亂を起せしも、元とは自ら一念の迷ひ、女色邪姪に溺れし、罪にて殺生瞋恚を生せしめは、皆な我れ自らの成す處、嗚呼誰れをか怨みんや、今ま桂子早足を憎みしは恥かしき我が心、日夜名利の毒酒に酔ひ、戀慕愛慾の縛につながれ、自業自得流轉の種、世の仇なるを感ずるのみ、嗚呼煩惱卽菩提、唯だ何事も一睡の夢、感じ來れば大空一輪の月、何執著かあらんや南無阿彌陀佛と唱名し、小劍を以て髪を切り捨て扇を取りて書き記し、

ましら啼く深山の奥に住みはて、

馴れ行く聲や友と聞かまし

「直に便門より走り出て夜半にまぎれて比叡山に行く」

(幕)

第五幕

第一齣 高野山麓學文路玉屋與三次宿

『千里姫、十四歳なる石童丸及雲井は枕邊に寄漸ひ看護し玉屋與次は側にて慰む』
千里、筑紫を去て十四年、雲井に連れ立ち高砂の浦に匿れしを、雲井の兄嘉平太が甥兵藤次が、金に眼が暗れ危き難儀も、靈狐の扶けに恙なく、比叡の御山に繁氏様には御はする由を聞き及び、尋ね行きても便りは知れず、高野山におはすると聞て此、まで尋ね來て日々山上に通ても、女人禁制の御山なれば詮もなく、石童丸殿は御顔を見知らず、雲井には死に別れ、思ひに迫る氣病より此の重病に成りはてしを、與次殿一家の心切に、甲斐なき命は繋げども所詮本腹思付なし、若しも我がなき後は、與次殿何卒此子の尋ぬる人を力を添へて給はりたし、

與三次、して其の御尋ねの御方は

千里、實は今まで包みしかども、其の尋ぬる人と申すは元とは筑紫の守護職加藤左衛門繁氏と申す御方、此の和子の父にておはするが、仔細あつて遁世なし、今は高

野御山にありとか此の和子は父御の幼名を繼て石童丸と名づけ申す、
與三次、驚て、やゝ知らぬこととて詮もなし、扱ては苺萱の御所におはせし繁氏様か、
元と某も筑紫に住みし者苺萱殿の御威勢をまのあたり見聞仕り候に如何なる仔細
の候て、某などの此の往家に入らせ給ふや實に定めなき世と謂ひながら淺まし
の事やなあ、

千里、して御身は如何して其れをば御存知なるか、

與三次、其の御不審は御尤も、元と某がしは筑紫なる玉田與次清忠と云へる武士の端
くれ、酒や女子に身を持つくづし彌生と云へる、心すなほな女子をだまし家に連れ
込み來りしを、妻女が彼れ此れ申せしを面倒に思ひ、妻を無理やりに迫ひ出せし
を、夜なく乳飲みの男の子に、乳を哺せ來りしを、門を鎖して入れざりに、
雪の深夜に凍死なし、彌生は泣伏し子供は叫び躓も世もあらず、苛責の悔、其儘
老母と子供を彌生に任せ、家出をなして逐電し、諸々國々を漂浪なし、今は茲に

て旅宿を營む此の身の果て、

此時次ぎの間より行脚の若僧あはたゞしく現れ出で

明源法師、今の様子を隣にて精しく聞きし某は、清忠殿の忘れ筐の一子に御座ります
る、父上御なつかしふ御座ります、

清忠、して御身は如何にして此の歲月を送りしか、

明源、御話し申すも涙の種、某がし養母彌生様には千里姫様と申す主君の爲めに御身
代に身まかり給ひ、中村勇太早足殿の御養育にて出家なし明源と申しまする、又
た勇太早足殿には權藤太數高及妻爪木を主君の仇と付けねらひ、阿波國に打果し
自ら割腹致しました、

「此の物語を聞いて清忠は泣出し、千里は驚き、石童丸は意外の懐ひ各々其々々
仕草あり、

千里姫は驚きの餘り病急にあらたまり瀕死となり後事を各々に頼み石童の手を取

り絶命す、

幕廻る

第二齣 高野山往生院が谷

「秋之景色薄き尾草咲き亂れ物淋敷風情

十四歳なる石童丸花道より立出て

日毎に通ふ彼の御山、いつを限りと云ふことなく、御尋ね申す父上には御顔も知らず、今の御名前も存せぬ故、往き通ふ人に尋ねても一向御様子知れ難く、便りに思ふ母上は病の床に身罷り給ひ、寄る邊汀の捨小舟情なき身の上じやなあ、

「本舞臺へ懸る上手より寂照坊の苧萱道心出て來る、骨肉の親子は自然の感通あつて互ひに面を見知らねども、苧萱道心は頻りに古郷の事を思出て、九州にて若し恙なかりせば千里姫に宿りし我子も、此の稚子程の歳にやあらん左様思へば、此の子は千里に能く似居る者など、暫し立佇りて石童丸を眺める、

石童丸も、苧萱道心を見て、頻りになつかしく想ひ年輩と云ひ眉秀で眼光の鋭く

元とは武士にてあらん凡人とも思はず、必ず我が尋ぬる父は此の人ならんと思ひ

石童丸、如何に御僧、筑紫より來りて住める遁世者を御存じなきか

苧萱道心、はつと胸を衝かれしが左あらぬ態にて、愚かなる問かな、此の一山に住む所の人は星の如く眞砂の如く多し、筑紫と云ふも九ヶ國にて何づれの國、何れの郡、何某と問はでは知れ申さず、と衣の袖を振切て立去らんとするを石童丸猶も追ひすがり、

石童丸、私の尋ぬるは、九州筑前國博多の守護職、加藤左衛門繁氏と申す御方の御行衛を承りたし、私も去年の春より此の麓の學文路の宿に滞在して、今日までも日毎の登山に風雨を犯し雪霜を凌ぎ當山の隅々隈々まで到らぬと云ふことなく、尋ねさまよう志を不憫と思ひ給はば教へさへ給へ、と涙を浮べ頼み入る、

苧萱、千里に面影瓜二つ、扱ては我が子にて有りしか、なつかしの故郷は如何に成り果てしか、名を明かし此の兒の心も慰めようかと飛立程の思ひを取り鎮め、いや

く無益のこと棄恩入無爲、眞實報恩者、と聞いて一度眞の道に入りし此の身淺ましくも心ひるみて恩愛を斷つ事能はず、三界に流轉して永く成佛せぬ時は是までの苦行も水の泡と堪へ兼ねたる涙を壓へ

荊萱、扱てもいたはしき事かな、其の繁氏と申す人は御身の父にておはせしか、

石童、仰の如く母諸共に尋ね來て去年三月母は三十二歳を一期として學文路の宿に荊

萱殿を戀ひ慕ひ終に身まかり候

荊萱、御身も既に十四五歳と見ゆれば物の道理も聞き別け給ふらん、先づ此の法師を

父繁氏殿と思ひて能く能く聞き召さる可し、

凡そ世間の人、其の妻子 舍宅に繋がれて名利にはだされ、一生を徒らに送るは佛縁の薄きが故なり、吾れ苟も弓馬の家に生れ、鎮西の守護として其威勞九州を覆ひ、富は萬鐘に比べしも今にては一場の春の夜の夢に同じ、何ぞ世間の俗塵に浴し、名利の奴となるべきや、汝此の年月、千辛萬苦して父に廻り遇はんとする

其の孝心は、天神地祇も感應し給ふらん、如何に況んや、繁氏入道が心の中も言語の及ぶ處にあらず、吾こそ父よと名乗りてだにあらば御身の悦び嘸かすと覺ゆ、去れど父入道は固く先師の戒を守りて世縁を厭ひ俗塵を遠ざく、妻子尋ね來らば、即ち六天の魔王が吾が道心を妨げん爲めに化して此の處に至るなるべし、吾れ既に煩惱の髪を斷ち永く靈山の法臣となれり、何くんぞ魔軍に降て再び三界の火宅に歸らんや、其志は確乎として抜く可からず、と繁氏殿御おはせしなれば、申し述べられなんと拙僧は推量致す、誠に繁氏法師に尋ね遇ふとも、必ず父子の名乗は有る可からずと存じ候

石童丸、御諭し一々御道理に御座ります、然らば某も父の跡を追ひ出塵の徒となつて

佛道に入り申さん、冀くは御庵室に御供して得度致たく候

荊萱、てもイミジクも今の一言、父入道の聞き給ひなば嘸や悦び給ふらん、いざ左らば我が庵室に伴はん、

石童、難有御座りまする

苺萱、して御身の名は、

石童、石童丸と申まする、

苺萱、え、今より佛道に入らば石童丸にては似あはしからず、是れより上乘坊信生と名くべし
(幕)

第三齣 苺萱庵室

「苺萱道心及上乘坊信生は鉦を鳴らして念佛修業を勤む、

花道より高野の悪僧數名衣袖を肩にからげ打入の身仕度をなし出立て、

甲僧、當山に密議せし如く高祖大師御在世以來鉦鼓を鳴らし念佛修業なす者未だ例しも御座らぬ、

乙僧、彼の鉦鼓は八釜しく我等觀念修業の邪魔で御座る、

丙僧、いで彼の法師が庵を破却し、鉦鼓を打ち碎き暮れんには、

一同、打つ立とう

「本舞臺に来て一同亂入し」

悪僧共、やあゝ寂坊照の苺萱道心、己れ等御山の教に背き念佛三昧鉦打ち鳴らし、甲、うるさくてくゝて

乙僧、觀念修業を邪魔する悪徒

丙僧、今我々が制陪する覺悟しやれ、

「各僧苺萱父子を擲打し或は蹴飛し鉦を外に擲げ付ける本尊經文を蹴散し亂暴狭籍をなし引上る」

「各悪僧、凱聲を放て外に立出れば庵の軒邊の杉の樹に光明かゞやく物を見て、悪僧、ありや何だ

同、はて不審儀

同、こりや大變だ、只今擲げしあの鉦が、樹に取り付て月の如く、光を發つはこりや

どうだ、あら恐ろしやとうとやなと、

「一同駈去る」

荻萱、増上慢の悪僧共、假令如何程妨げなすとも、我が信念は鐵石の如く、何に恐るゝことかあらん、最早此の山も是れまでなれば信濃善光寺に趣きの眞との道を極む可しと謂ふ、

(幕)

一枚法語 善光寺に於て師法然上人報恩の爲め地藏菩薩の像を刻し拜禮者に與へし物晝あれば夜ありと知る故に燈燭の備をなす、暑あれば必ず寒ありと知る故に、秋の礎の音堪へず、老の眠りを驚かせども、生あれば必ず死ありといふ事は知らずや、一向何の用意もなし、こは如何なる心の怠りにや、無常迅速なり只今も知れず、死期の到來せし時如何うせんや、もし吾が言を用ひて、死の備をせんと欲せば、何時にもあれ只今命おはると思ひて、萬事を放下し、己れの耳に聞ふる程高からず低からず、南無阿彌陀佛と十念すべし、時と所と不淨を選ばず、唯忘れざるを、第一とす夢めく怠

る可からず、

建保元年正月二十四日 等阿彌陀佛

菊池三溪先生原著

矯

賊

(五幕八場)

緒言

往昔菊池三溪先生實在の奇談を集め、本朝俱初新誌と名け著書せられたり、篇中に怪盜矯賊の記あり、奇想天外誠に稀觀たり、彼の『シエクスピヤ』の『ロミオ』『ヂュエリット』は、戀の爲めに愛人の塚を撥き、矯賊は強欲の爲めに墳墓を掘る、其の慘悽眉を顰縮す、回顧す十數年前餘小金井蘆洲に此の談をなす、蘆洲直ちに筆寫し、之れを北越奇談と名け、常に此の稿を演ず、聽客扼腕嚙唾、或は耳を傾け大に喝采を受く余案するに或ぼ之れを脚色し、演劇に登場せしめば、其興や又尠からずと茲に卑文を脚色して此の稿をなすと云爾

矯 賊

第 壹 幕

第一齣 糸魚川堤の場

「舞臺正面、糸魚川堤、河流を隔て、遠く山を望む、花道より魚住瀬左衛門（歳格恰五十四五）甥茂助（歳格恰廿二、三を）伴ひ墓參の歸り、珠數を爪操り出て來り、七三の部に止まり」

瀬左、時候も漸く春を催し、山々の雪も解け稍の花も咲き笑ふに、其れに引更へ、娘雪野の此の節の容態、何やら心懸り、今日も御菩提所參詣の折も、一心込めて觀音様や阿彌陀如來に、祈請を爲して全快を願ひ置しも、どうぞ本復して暮れ、ば好いがな！

茂助、叔父上様の御心配の一方ならぬは、此頃の御様子にも、其れと御察し申上られ

ます、私とて口には申上ませぬが、朝け暮れ雪野様の御病氣の御癒りなされます様、神佛に禱らぬ日は御座りませぬが、其れにしても、叔上や叔母上の御躰だに御障りが出来ましては、夫こそ大變で御座りますに由て、其邊どうぞ御心を付けられませ、

瀬左、茂助や、私も漸々取る齡だし、御前も薄々承知の事なれど、雪野は丁度今年は十九の厄年、來年になれば、御前の無き父ごとの約束もあれば、御前と夫婦にして、私共は隱居をしようと思ふ折柄、あゝまゝならぬ事だなあ、

茂助、叔父上あの向よりお出でになりますは、尙庵先生では御座りませぬが、屹度内へ見舞に御出になつたので御座りましょう、

瀬左、あゝ如何にも尙庵先生だ、どれ／＼行き逢つて、病人の様子を尋ねばならぬ、ばならぬわい、

「瀬左茂助は、本舞臺に急ぐ、醫尙庵は僕一人を伴ひ、本舞臺上手の方より出て來り、此で兩方互に行き遇ふ」

尙庵、これは／＼、魚住の御主人、只今尊宅へ參りて治療の歸りがけ、是れは好い所で御目に懸た、實は母ごの方によく御話し申上げんとは思いましたが、何様御婦人のことにて先づ先立つは涙なれば、如何がはせんかと考へながら、立戻り來し道すがら、御身に御目通り致せしは何により、早速申上るが、扱て御娘子の御病氣は今年の秋頃風を『こじらかし』肺勞の氣味となられしが、昨今は大分衰弱も加はり、脉も誠に面白からず、愚老も人參、犀角、色々の妙藥を進むれど、病勞更らに退かず、ことに御氣性のことゝて、何や角かと、御氣遣ひをなされ、御氣はしつかり致され居るも、彼の脉の御様子では、御快方は如何かと案じ入られまするいやはや、御心中實に御察し申し入る儀で御座る、

瀬左、すりや容態心元なしとの御見立か、今も道々申せしことながら、何様私の家は大切な一人娘、其れに來年は此の茂助と結婚致させ、家の相續も致させねばな

らぬ翦先、こりやごうしたら宜敷御座りませうのう、例へ金錢は如何程か、り
ましても、何とか施ふ手立は御座りませぬか、先生後生でござります、如何様と
も御骨折り下さりませぬか、これ茂助其方も共々先生に御願致せよ、

茂助、只今も叔父様よりも申上げましたる通り、掛け更へのなき大切な雪野様、病氣
のことは、御醫者を御頼み申上るより外に致し方も御座りませぬ、何卒先生の御
考へで御助けなされて下さりませ、

尙庵、御仰までもなく、欲徳づくのことではなく、自分も業務として如何しても御救
ひ申度は山々、今迄随分秘法秘策も用ひしなれど、何様癆性と申す病は、難儀な
もので御座る、是れが近くのことなれば、御殿醫の方にも御診察を受けるの道も
あらんが、御役勤めもあることなれば、此の越路迄は御出を願ふも叶はぬこと又
た御出を願ふことが叶ふても、其の到着迄に御病人の容態が氣遣はれます、困た
ことで御座るのふ、

「三人惆悵嘆息の態にて暮廻る」

第二齣 魚住家病間

「舞臺上手に病間あり、周圍は庭園にて櫻、桃、梅、李、一時に開花の盛り、小
鳥が囀りの聲、北越の春を現す、

雪野は床の上に脇側にもたれ、側らに母路久（年頃四十八九）侍女なほ、背を擦
り居る」

母路久、今日はまあなんと晴れ晴れとした、好い天氣やら、庭の花も皆な咲き揃ひ、
うらゝかな日寄り、御前の氣分はごうじやいなあ、少しは機嫌が良いかや、
直、御嬢様、御覽遊ばせ、其れ彼處の技に、鶯が啼て居ります、

雪野（重苦しき顔を上げ）ほんに好き天氣で、花も見事に詠めますが、野山の春は一
としは宜敷ことで御座りませう、いつになつたら參られますやら、と鬱ち塞く
女中清、「立出で」お嬢様に申上ます、只今琴の御師匠様が、都より胡弓の上手が參り

ましたので、御嬢様の御すきな曲を何か御聞かせ申上たひ、御枕元では却て噂々しい故、御隣の御部屋で御調べ致したひと仰つてゞ御座ますが、如何致しましよ
う、

母、其れは々々々、好ひ處へ御出でだのふ、

雪野、清や、伺度はあるなれど、寢間では却て失禮なれば、隣り座敷で、のふ母様、母、其れ其れ、其方が御前も遠慮なく伺へてよかろう、清お前好きに計らつても、清、かしこまりました、「と立去る」

「琴歌、清水寺の鐘の聲、祇園情舎をあらはし、諸行無常の聲やらん」

雪野、あれは熊野之曲、去年はお師匠様と合奏し、今年は床の上で胡弓の合奏を聴きますのも諸行無常に覺へます、

直、眼には花、耳にはお琴、何んと好ひお楽しみでは御座りませぬか、

「琴歌、あら心なの村雨やな、春雨の降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜ま

ぬ人やある」

雪野、ふるは涙の櫻、花、「嘆聲を放て」

其の通りじや、私も父上や母様の御手厚い御養育を受けましても、何時死ぬやら情けないことで御座ります、

母、これこれ娘、お前何を云ふじや、其んな氣病みすることは、必ずならぬと、尙庵様もきつい御戒め、折角お前を慰めの琴も、却て氣病の種となるぞへ、人間は一
寸前きは暗の世で、明日にも誰れがどうなるか別るものじやないぞへ、お前のよ
うに思ひも寄らぬことに氣を病んでは、たとへ、どの様な好い藥を飲み、嗜婆、
扁鵲、が脈を取つても、何んにもならぬ、明日は今日より必ず好くなる、今月は
寢て居ても來月は起られると思はば、何んの氣をもむ事はない、病は氣からと云
ふではないか、

直、ほんに母上様の御仰る通りで御座ります、御心廣く遊ばしませ、

瀬左、「入來り」是れ娘や、尙庵様よりな、此の薬は奇代の妙薬なれば、是非飲せよとの御心切な御使じや、早く飲んで癒しくおくれ、これこれ直や、お前此の薬煎じて來なよ、

直、忝まりました、「立去る」

雪野、あゝ何んだか氣持が悪ひ、目が暗む様な、

瀬左、路久、其れ々々、少し長く起て居たせいならん、冷へてはいかん、早く臥かして、

「兩親にて雪野を臥床せしむ」

路久、汝やアナタ「瀬左に對し」何やら顔色が、

瀬左、薬はまだか々々々、

直、清二人薬を持て來る、薬を進むるに飲み込む力なし

瀬左、路久、顔見合せ、誰れか尙庵様を早く、

茂助、「立出て」申付け居りますより、私が一走り急ぎましよう、と花道へ走る、一同病人の様子を見護り、

幕

第 貳 幕

第一齣 極樂寺門前深夜

「舞臺正面極樂寺土塀、上手に門、下手は山を望む、遙かに看經の聲、木魚の音、雁の聲、花道より出て來る、羽織、袴、呂塗大小、宗十郎頭巾姿、歳頃廿四五若武士、七三の部に止まり

若武士、今宵も、はや、三更近く宵闇み暗き、鳥羽玉の、空らに聞ゆる雁の聲、花を見捨て、飛び去るは、春の心を惜まぬや、慣れし故郷を慕ひ行く、遙かるに聞こゆる木魚の音、すりや、まだ寺では寝ぬと見えるな！、

「本舞臺に急ぎ、門前に立ち止まり、周圍を見廻し、頼のもうと門を叩く、内よ

り門番爺答て、何御用かなと門内に叫ぶ」

若武士、少しく火急に、御意得度きことありて、御住職に御目通りが願ひ度、爺、どう云ふ御用か存じませぬが、深夜のことでも御座れば、明朝のことに願ひます若武士、兎に角も、くゞり門丈けでも開けてもらひたい、是非に頼み入る、猶御身に頼み入れ置き度きこともあれば、

「然らばと、くゞり門を開き、爺が顔を出せば、若武士は頭巾を取り鄭重に、挨拶をなす姿を見て爺うなすきて立ち出づる、

若武士、夜中御休みの處心なく、御迷惑至極に存じ入る、拙者事は、榊原式部大輔家來、今井田錦之丞と申する者、是非共御住職に、御目通り御意得度ことありて罷出ました、未だ看經の御聲が遙かに聞えますれば、御寢ならざること、推察仕るが、何卒御取次が願ひ度ひ、あゝ若し、此れは甚だ些少の寸志なれど、春猶寒き夜の風寢酒の料に御納め被下れ、「と小判一枚を渡す」

爺、此れはこれは、斯様の大金を載きましては「と北叟恵み」先づ此れへ御入り下なりませ、御取次致して見ましよう、「と幕廻る」

第貳齣 極極樂寺庫裡

「上手に本堂あり、正面廣間住職座、

下手襖を開き、門番爺入り來り」

爺、方丈様、御看經は御済みになりましたか、住職良然、爺や何か用か、

爺、はい申上ますが、只今榊原家の御家臣今井田様とか、仰ひまする麗派な御武士様が、御出でになりましたして、方丈様に御目通りが願ひたひと申されますので、最早深夜のことでもあり、明朝又た御出を願ひますと申上げました處、看經の御聲が聞へますので、未だ御看經中で御休みにはならぬ御様子、是非共火急に御目通りが願ひ度ので、甚だ御迷惑とは存ずれど御取次の程願ひ度ひと申て、御玄關に立

留まり居りますが、能く々々の御用と御見受け致しますに由て、何卒方丈様御遇なすて、おやり成されましては如何で御座りましょう、誠に氣の毒の態に察しられます、

良然、はて、此の深夜に何用あつて參られしか、身共もこれから休もうと存じ居る處、困つた事だなあ、左程火急の用事とあれば、其用向丈を手短かに聞くと致そう、此れへ御通し申せ、

爺、かしこまりました、左様して御やりになりましたら、嘸ぞ喜ぶことで御座りましょう、

「爺は錦之亟を案内して來る、錦之亟鄭重に住職に挨拶をなす、」

働之亟、拙者事は、榊原式部大輔家臣今井田錦之亟と申する者、御見知り置き願度し良然、拙僧は、當寺住職良然で御座る、して火急の御用事とは、

錦之亟、夜中御迷惑をも顧みず推參、御目通相叶難有仕合に存じまする、實はちと秘

密を要する儀にて、次第によりては拙者も最後の決心仕る心組にて參上致しました、恐入る儀では御座りまするが、他聞を禪る事に候へば、何卒御人拂を願度、良然、見らるゝ通り、深更のことにて、所化共皆な寢所に入りたれば、拙僧の外何人も居り申さず、御懸念なく物語られよ、

錦之亟、然らば申述ますが、拙者事、當年廿五歳、互ひの兩親の許しを得て、魚住瀬左衛門娘雪野と結婚の約束成りて、既に昨年にも其式を擧ぐ可き處、拙者ことは殿の御供にて江戸表に參勤の爲め、心ならずも互に暫し離れ居りしが、雪野は申すも耻かしながら、某を戀ひ慕ひ餘り思詰めしが病となり、終に身まかり昨日當寺へ埋葬とのこと、某も亦た晝は幻ろし、夜はうつゝと、彼れが姿を忘れ難く、此程歸藩し見れば、終にはかなくも雪野は此の世を去りぬと聽て、心も亂れ、氣も狂はん斗りにして、朝暮其れのみ思ひ凝り、今は如何とも、自らを制し難く、誠に御無理の願ひとは存すれども、竊かに彼の墓を開き、一目遇はせて給へかし

其望みをとげん爲め、人知れず態々深更に推參せし次第、御佛は衆生を救ひ給ふ御慈悲心、殊に御坊徳高く情けも厚き善知識、最早呼吸もなき屍躰に逢てなごりを惜むとて、何の害があらん、若し御承引あれば、人手を要せず某一人にて始末なし、元の如くに致し置く可きなれば、御無理を願ふは恐れ多けれど、何卒々々御許し下されたし」と平伏嘆願す

良然、こは思ひ懸けなき無理難題、拙僧が申す處、心を落付け承給はられよ、若年の迷ひ、煩惱の雲に鎖され、意馬瀕りに心猿に鞭打て、常の矩を越へ、此世からなる焦熱地獄の苦みを爲す、御見受け申すに名ある藩士に仕へ、文武の道も劣らぬ若武者、何とて斯くは戀の奴となり、理不盡のことを申さるゝや、悟り來れば夢の如く、熱病の癒するが如し、悔ひある可きは必然の理なり、殊更死者の墓を撥くは、國禁を犯すものにして、御身も我れも同罪ならずや、左様御身が彼の女を慕ふなれば、懇ごろに回向供養し、來世に夫婦をとげられよ、南無阿彌陀々々々々

「珠數をつまぐり念唱す」

錦之亟、懇ごろの御諭し難有存じ上げます、此上は重て願出も叶ふまじ、然らば御佛に拜を御許し被下まし、

「起つて本堂佛前に進み、懷中より切餅小判を取り出し、輕少ながら雪野へ手向の御回向の料を御佛に奉ると、焼香沈黙禮拜を了り、脇差を抜き、もろ膚脱ぎて」
錦之亟、御坊よ何卒御許し下され、御佛の御前を汚し奉る罰輕らず、何れ地獄奈落に行く可き此身と

「既に片腹に脇差を突立てんとするを、良然之れを見て、走り寄り來り、」
良然、如何に煩惱に狂ふとて、血迷ひたるか是れ若者、己れの非望を達せねばとて御佛の御前、又拙僧の目の當り、生害なすとは何事ぞ、

錦之亟、懇ごろの御理解は、誠に辱けなけれども、逆も悟れぬ迷の苦惱、元より決心致して參りしなれば、若し御聞濟み下さらねば、此の覺悟は初めより心に定めし

ことなれば、此場を汚すの御叱りなれば、雪野の塚にて相はてん、不憫と御思召給らば、一篇の御回向こそ願はしけれ、

「と、猶も自殺を念ずるを、良然之れを押留め、如意を以て、刀を打ち落す」

錦之亟、御無理の様には御座れども、雪野に御遇せ下さるや、又は生害仕るか、良然、其れは、

錦之亟、生害仕らふか、此場を汚すも恐れあれば、墓所にて自らはて申す可きか、兩人、さあ、さあ、さあ、々々々々々々

錦之亟、斯程、心中包まず申上げてても、御聞入は下さらぬか、扱ては竊かに忍び入り燃ゆる想ひを達す可かりしに、其れにては夜盗の疑ひを蒙るも、忌はしき事よと事情を打明け申述べたること、口惜しく、今は進退玆に極まり、死を撰むの一途のみ、

良然、如何なる宿業か因縁か、孔子も朽木は彫す可からず、冀土の墻は櫛つ可からず

と謂へり、早や退散致されよ、拙僧は寢所へ參るまでなり、

錦之亟、公の私と申すこともあれば御坊には、御寢所に入らせ給へ、只管御見免じ下さる様、必ず御迷惑は掛ることあるまじ、只だ知るものは御坊と某し、

「良然面を背むけて奥へ入る」

幕廻る

第 參 齣

「極樂寺墓地上手に庫裡の窓あり、正面墓標に魚住雪野之墓と記せる新塚あり、周圍に魚住家の諸墓碑配列し、白張提灯及白木机に茶腕などあり、上天には下弦の片われ月、物すごく照す、錦之亟は、羽織脱ぎ捨て、袴の股立、綾だすき、姿にて鍬を以て新塚を掘り、棺を引出し、之れを開きて、生ける人に物言ふ如く抱擁し、錦哭し、戀しき物思、盡きぬ名殘の惜みをなす、庫裡の窓より、竊かに良然之れを窺ひ見る」

幕

第 三 幕

第一齣 魚住家初七日逮夜場

「廣間に僧侶三人、外多數の客、追善供養の爲め、食膳を了り、各々明日の墓參を約し歸り去る」

瀬左、妻路久に向て、

今日は雪野が無なりて六日、夢の様な心知だなあ、

路久、私はどうしても、雪野は無くなつたとは思へません、命が更へられるものなら、私が死んで參りたふ御座ります、

瀬左、尤もじゃ、私も取る歳、何に樂みに永へて何かせん、「と夫婦共に哀悼の涙に暮る」

「外に歳格恰四五六の旅僧、滿面に鬚を貯へ、白衣、黒法衣を纏ひ、負籠を擔

ひ、杖を携へ、旅笠を持ち、頼む、々々」

瀬左、これ々々、誰か取次があるぞへ、

「はいと答へて奥より、茂助立出する」

茂助、どなた様で御座りましょうか、して何れより御出になりました、

旅僧、拙僧は、高野山之僧俊海と申す者、ちと御主人に御意得度、御目通申度ひ、御取次下され、

「茂助忝まりましたと此の由を瀬左衛門に傳ふ」

瀬左、何御用かは存ねど、今日は娘雪野の一七日の逮夜、御出家の御尋ねを蒙るも、

佛果菩提の爲めなるべし、先づ々々、是れへ御通し申せ、

茂助、忝まりました、然らば此れへ御通り下されまし、

俊海、珠數を爪操り、一禮し、拙僧ことは高野山の僧俊海と申す、諸國行脚の者なるが、ちと不思議なることありて、御尋申度、罷出たる次第、

瀬左、如何様のことは存じませぬが、今日は娘の一七日の速夜、只今追善供養を終りましたる處、折りも折り、御坊の御出では是れは何か佛様の御引合せにも御座りませう、何はなくとも御配膳申上よ、と命ず、

俊海、其れは誠に辱ふ御座る、拙僧も先づ御回向の看經など仕ろう、憚りながら佛間へ御案内下され、と幕廻る、

第二齣 魚住家佛間

俊海看經既に了らんとし、瀬左夫婦及茂助各珠數を爪操り「傍らに配膳の用意あり」

瀬左、これは々々々、誠に不慮御供養難有御禮を申上ます、先づ以て御疲もなされましたろう、何は兎も角、粗末なる膳部、箸を御付け下されまし、

俊海、其れは辱ふは御座れども、用事を先づ以て申上げんが、多聞も憚りあれば、御人拂ひが願ひたし、

瀬左、左様に御座りまするか、然らば茂助や、御前は少々御慮遠申せ、と「茂助は次

に立去る」して此れなるは、妻路久と申しますが、一身同體の夫婦、御差支なくば同席を御許し下されまし、

俊海、其れは實に御尤のこと、然らば御列座の處にて物語らん、而して拙者は、身は雲水の定めなき、何處を宿と云ふことなく、昨夜峠にて日を暮し、折から暗夜に歩行も難儀、ふと見れば山中に小祠ありて、是れ幸ひと堂内に一夜を明さんと臥したるに、時刻も、八つ過ぎかと思しきに、遠く遙に女子のすゝり泣する聲耳に入り、こは不思議と、遠ち近き方を詠むれども、片割れ月の影暗く、木の繁みより差す薄明り、何物も目に見えず、こは夢かやと亦た打臥せしに、其泣聲は益々近づき、今は耳元に泣くが如く、心を静め、能々窺ひ見れば、歳の頃十八九なる美しき娘、白衣を纏ひ、髪振り亂し、さめ々と泣く姿、拙僧直に起き直り、御身は何物か、又何故深夜此の所に來りしぞ、人身犠供に捨て置かれたるかど、問ひ掛くれば、其の娘の申すには、妾は、糸魚川に魚住瀬左衛門と申しまする者の娘に

して、只だ一人子の幸せに、父母のいつくしみも、一方ならず、何不自由なく、氣隨氣儘の日を暮し、他人も羨む程なりしに、去年の秋より病ひの床に伏し、父母の厚き手當も甲斐なくて、終に此の世を去りたるが、如何なる前世の報にや、今は地獄に墮落して、牛頭馬頭の追立、焦熱紅蓮の苦みに堪へやらず、救ひの御佛に、見離されしか、餓鬼道の酷たらしさ、泣けど叫べど詮方も、汀に浮ぶ捨小舟、只だ此上の御慈悲には、御坊は崇とき、御寺の御修業者、明日は越し路の御旅なれば、糸魚川に父母を御尋あつて、功德の高き御經を寫し、高野山に納めて給へ、丁度明日は一七日の逮夜なれば、此の願を叶へてたべ給へと、泣き伏す、姿、して又た此の櫛、箸は、死出の旅路の粧ひに、母が身に添へ給ひし物、之れを證據に、吳々も御頼み申上まする、と云ふかと思へば、形は失せて、後と瀧の音、松風の聲、淋しく膚に冷氣を感じるのみ、して此の品に、御見覺ありや否、瀨左、こはこれ、思ひ懸けなき御物語り、情なや、不憫やなと、「泣入る」

路久、して、其櫛箸は私が慥かに棺に納めし品、如何なる因果の報にや、心も優しく親にも孝行、何一とて悪しきことも無きに、其りや餘り、佛様も聞へませぬ、此りやどうしたら好いことやら、いとしゃ、悲しや、不憫やと、まろび崩れて、泣き叫ぶ、

俊海、其の御嘆きは無理ならねど、今は甲斐無き跡の弔ひ、供養の外はなく、其れに付けても、亡者の望む、功德の寫經を、手續きなされ、少しも早く、御寺に納めて看經し、回向供養をなさる可し、是れにて拙僧も、亡者の頼みも達せしなれば御暇申す、と致そう「南無阿彌佛、々々々々々、支離生死、頓生菩提」
「と珠數爪操りて、立たんとするを、瀨左急ぎ之れを押留め」

瀨左、御坊、其れは餘りに御情けなふ御座ります、娘の亡靈が御慕ひ申すも、崇ふとき御坊の御功力、又た此處へ御出下さるも、淺からぬ因縁、其れを知るは、御坊と私共夫婦の者、此儘見捨て、立去り給ふは、餘り御情けなふ存じます、御坊の

御蔭にて、今初めて知る娘の難儀、

路久、思へば御坊は生き佛様、御迷惑かは存じませぬと、今宵此に御宿下され、緩る々々御話伺ひまして、救ひの道を御授け下されまし、何卒これ、此の通り御願を
「と合掌嘆願す」

瀬左、好い處に心付きました、偏に御坊御願ひで御座ります、

俊海、左程に、拙僧を御慕ひ下さるゝは、忝じけなけれど、行脚修業せにや、ならぬ身の上、先きの旅路も急がれて、

瀬左、御尤には御座れども、御坊は御出家の御身とて、人を救ひ、濟度し給ふが御本分、恐れ入りたることなれど、何とか、其の因縁も淺からぬ亡者を、初め、私共心細き、憫れ、悲しき者共を、御助けは下さりませぬかちと御恨みに存じます、路久、今も主の申します通り、袖擦り合ふも他生の縁、若し御願ひをは、御聞届け下さらねば、亡き娘も浮ぶ瀬とては御座りませぬ、さぞ御恨み申すで、御座りま

しよう、

俊海、扱て々々困たことに相成た、して御兩所には、如何致さば宜敷かろうな、拙僧の思案には大般若なり、法華經なりの、寫經を、御菩提所の住職にでも、御頼みありて、高野山なり、比叡山なりへ、御納めなされい、去りながら、何れにしても、大部の經卷、二人や三人の寫經では、何つを限りに、有明の眞如の月を見ること難し、若し拙僧行脚の身ならずば、高野山には、幾百の僧侶ありて、力を添へて寫すなら、瞬く間に出來もせんが、當家御菩提所には、幾人の出家が居らるゝや、

瀬左、それは、其れは、當家菩提所には住職外、二三人の所化、とても、短き月日には間にも合ふまじ、其隙長ければ、長い程娘の苦み、其れが金子で濟むことなら敢て費へは厭ひませぬ、何卒御坊御引受け被下、御本山の御坊達に、御書き寫しが願ひ度、御旅先の所を、誠に御無理な御願ながら、御聞濟なされて被下まし、

これ路久や、御前佛間の戸棚の、手文庫を持ておじや、「はいとへて路久は手文庫を取りに立つ、之れを瀬左に渡す」

瀬左、黄金包五百兩を出し、紫の帛紗に包み、扱て此れは誠に些少なれども、御山の御坊方へ寫經の御禮、亦た御寺への祠堂金、御面倒様なれど、御取斗が願ひ度く外に之れは僅かなれども、御坊への布施、是非に御受け下され度し、

「と外に黄金小包を差出す」

俊海、然らば、俗に申す乗り掛つた舟と、申すこともあれば、慥に御預り申し、必ず御心配あるな、諸坊の手に由て、七日の間に書き上る様、致すで御座ろう、其れにしても、此れより直に高野に戻ると致した所で、幾日かの時を費さねばならず、然らば直に此れより御暇申し、歸路の旅路を急ぐと致そう

「と再び佛壇に向て、稱名念佛」

瀬左、夜中のことにてはあり、山道は一層の御難儀誰か案内人を、御伴致させるで

御座りましょう、

俊海、いやいや、其儀は御無用にして下され、夜の暗きは、今宵ばかりではない、昨晩も暗かつた、又明晩も同じこと、狎れて居りますれば、却て邪魔になります、はつはつ々々々、然らば是れにて、御暇仕る、跡追善菩提を爲し給ふ可し、「やがて仕度をなし、花道に入る」瀬左夫婦は見送り、合掌禮拜す、奥より茂助出て來り、

茂助、叔父上、私最前より、彼の御坊の様子を窺ひ居りますに、ちと胸に落ぬ節々ありて、何やら油斷なりませぬ、私これより跡を追ひ、正體を見届け参ります、瀬左、これこれ、御前は何を謂ぞや、世にも得難き、崇ふとき御坊、罰が當りますぞえ茂助、左様で御座りますか、さまで御信じ遊ばしましては、何事を申上げてもと、

「思入りあり、再び奥に入り、脇途より旅姿に身を變へ、俊海の跡を追ひ、花道を走り行き、瀬左夫婦は佛壇に向て、稱名默禱す、」

幕

第四幕

第一齣 山中祠堂の場

「舞臺上手に、小祠堂あり、中央山嶺、下手藪、殘月出て薄明り、花道より旅僧俊海、負籠を擔ひ、杖を持って、旅笠を被むり、立出で、七三の所に留まり」

俊海、春とはいへど、風寒く、人里離れし山中に、道さへ暗く、狭き世に、隠れ住む身の成合は、善と惡との二た面て、子を思ふ親の心の弱味に付け込み、坊主上りを筋書きに、打た芝居の一狂言、望みもしねーに、差出す切餅、此れで當分呼吸が付けらー、おー、此のあたりで、新公が待受け居る筈だつた、

「と本舞臺に懸り、小祠堂の縁に腰を掛け」

おーくたびれた、一服やろうか「と負籠の中より烟具を出し燧石を擦る」

新之助 錦之亟)、祠堂の戸を開き、中より立出づ、

「黒羽二重の着流し大小を帶し宗十郎頭巾の姿」

新之助、おい兄き、仕事はどうした、甘くいつたか、

重太郎(俊海)、お、新公、御前茲で待て居たのか、

新、大分隙がかゝるので一寝りしたが、中は荒れはてた、きたねー御座敷よ、

重太郎、おーそーか、是れ見ねー、細工は流々仕上を御覧じろだ、此れ此の通り濡手

で粟よ、「金包を示す」

新之助、そいつあ上首尾だ、時に兄き「おめー」の着付けは用意して來たせ、其れ此の中に、匍入つて、付け鬚でも取たり、着更たり仕度をしねー、

重太郎、そいつは、忝けない、

「と祠堂内に入り、仕度を更へ、道行振りに、宗匠頭巾、小脇差、草履ばきの姿となり立出る、」

重太郎、さあ新公、金は山別けだ、

「と懷中より金子を取出し、分配す」

新之助、こいつあ難有へ、おい兄き、夜の明けねー中に、峠を越そをよ、

重太郎、まだ手前は歳が若かへな、待ねーよと、

「今迄着用の法衣、白衣、負籠、笠など持物一切を祠堂の側に持ち出し、石燧に火を點し、負籠の中より、附木を取り出し、持物一切に火を付け」

重太郎、おめー、こーして火葬にして置かなけやー、後ちの『たゝり』に成るじやー
ねーか、

新之助、成程、亀の甲より歳の功だ、

重太郎、おい新公、藪の中で『がさ々々』云ふじやーねーか、一寸見て來ねー、

新之助、そーか、「見に行く」何にも居やあしねーよ、恐らく此で火を燃たから、鹿か熊でも驚て遁げ出しやあがつたのだらう、

重太郎、其ふか、待ちえーよ『こいつ』が、皆な灰になる迄一服しなよ、

新之助、兄き、随分おめーも窮屈、だつたろーな、己れも、生れが待士だけ、おつな

芝居はやつたけど、極樂寺の正直坊主には、殆んど弱つたよー、其れにいくら好い女でも、死人に抱付く役は餘んまり好い心持じやーねーあ、其れによ、頭に櫛箸があるものと手さぐりでも別らず、おめー、棺の中に落ちてるじやあねーか、

重太郎、己れも暇イタマを云て、歸る様子したら、手文庫から此の金をよこしたが、未だ大分手文庫に有た様子だが、餘んまり欲をかくと、化けの皮が剥るから、諦らめて來たよ、

さー、もー火も、大低燃盡したから、跡み消してしめーねー、どれ出懸けようか

「と兩人つれ立ち、上手揚幕に入るを、藪の中より、茂助窺ひ見る」 幕

第五幕

第一齣 新潟遊女屋の場

「舞臺一面、大廣間、重太郎、新之助、を主客とし、藝妓多數、三味線及封間は樽を叩てお袈裟節を歌ひ踊りて、幕開く、重、新、大盡振をなし、大に酒盃を傾け、一同、大取持ちをなす」

「座敷外廊下に、茂助忍び寄り、窺ひ見て、又引返し、捕手多數を伴ひ來る」

茂助、慥かに、彼の二人の者に御座りませぬ、

「直ちに捕手襲ひ入る」

捕手、御用、々々、御用、々々、

「重太郎、新之助刀を取り身構へ、大立廻りとなる、重太郎に、捕手多數折り重り捕縛、之れを見て、新之助正面庭先に逃る」

幕廻る

第二齣 遊女屋奥庭

八方より捕手は新之助を取り圍み、新之助大童となつて立ち廻り終に捕られて、

幕

忠義が仇

緒言

韓非子十過篇に曰く、小忠は大忠の賊なり、小利を顧みるは大利の殘也、昔楚共王晋厲公と鄆陽に戦ふ、共王の將師、司馬子反戦ひ酣なる時、子反渴して飲を求む、子反の臣豎穀陽觴酒を操て之れを進む、子反之れを口にして曰く、是れ水に非ずして酒ならずや、子反元より酒を嗜む、甘として之れを乾す、奮闘奮進、空腹の爲め酔て遂に戦を罷め、幄中に憩ふ、晋の軍襲撃して來る、共王子反を召す、子反來らず自ら幄中に駕を驅る、幄中酒臭満ちて子反眠る、王、子反を呼て、楚國の興亡浮沈此一戦にありと、子反酔て之を斥く、王怒て終に子反を斬て軍律に照す、之れ穀陽小忠の爲なり、

善意が惡果を來し、惡意が善果を招くといふ矛盾は人生に有りがちな現象で、是れは昔より倫理學者や道學者も中々議論のある難問なり、其の例を以て申せば、君父の爲めに慈愛の子を犠牲にしたり（松王、熊谷など演劇にある如く）又は他人を意見して其の意見された爲めに其人悔いて自殺したり、如斯例は澤山ありて、枚擧に遑あらず、是れ等を如何に判定し善惡を別つかと云ふことは中々むづかしきことである、過般の大震火に付ては、餘談百出千言數多き中に小仁の爲めに大仁を滅し小忠の爲めに大忠を失うた話もあらうと推して此の稿を作る

地震が十二時に起てから直ぐ火事が始まつた所は諸所にありましたが、人形町から鐙橋附近は午後の五時から六時には焼け盡くしました、丸屋利三郎と云ふ貴金屬小問屋が人形町に相當繁昌する店を持ち、丹青の揚句可なりな資産も出來、品物も随分高價の物を藏し、場所柄丈に贅澤屋でして、又利三郎さんは世事がよく、商賣に目がき

いて、一寸あくの抜けた正直な人、其細君は理智儀のおかみさんで、至て夫には貞淑忠實で、常に儉約に身上大事に勤め、店員も若衆小僧などありて、今日は若衆の一人は地方に商賣に、一人は胃腸病かなにかで寝て居り、今目前猛火に迫られ今まではまさか焼けまいと安心して居たが、急轉直下の紅蓮の猛火に、主人は店の貴重品やら書類などを、細君は衣服など自分々に擔ひ負ふて、それ遁げようと云ふ時に、主人は如何にも喉が渴てたまらぬので、細君に『水を一杯おくれ』と命せしが、元來此の利三郎さん、別に道樂と云ふこともなければ、性來酒が大嗜、平常でも商賣がもうかつたからと一盃、今月晦日は思ふ程に商賣がなかつたから縁善直しに一盃、雨が降つて陰氣だから一盃、暑が激しから暑氣拂に一盃、冬は寒くて風を引くからと云ふ按排に、アルコール分を服用さへすれば、天下泰平と云ふ人物、ところで平素から亭主忠義なる細君が、水道捻を捻て水を汲まんとせしに、地震の被害にて一滴の水もない、一寸顧みれば、例の芳醇の惣花の樽が目付た「日頃から亭主の好物なり、水はなし

ドーセ捨て、行く酒、もつたいなくもあり」と心付て飲み口に受けて片口に弱一升か少くも七八合は入ると思ふ器に、おしげもなく「ドタタタ」注ぎ込み『へーアナタ』と主人の前に出せしを、亭主は『應』と請て一口グイと飲みて『おいこれは酒だな』と云ひしが、元より好む所喉渴の時にはあり、狼狽の場合勇氣を付けるにもと一氣に飲み干し『サア逃げよう』と二人は各荷物を負ひ、丸の内と心ざし鎧橋迄來れば人は群衆の山「コハ叶はじ」と人と人のかき別け目的地の方へ進む途中、妻女は見はぐれ、火には追はれ、早足かけ足、東京驛邊迄逃げ延び來れば、此時既に冷酒を一呼に飲んだ、酔は催し來て身體自由ならずやつと宮城前廣場に來れば、最早酩酊十二分、其儘大切の荷物を傍らにして横臥せしま、後では華胥國の旅と眠り、暫くして眼醒めて周圍を見廻せば、人や荷物は山の如く、自分の荷物はと尋るに、左右前後懐の内外を探りて何物もない、他の人が誤てか盗みかと荷物々々を尋れど、火事の燈り明しと雖も、確と其れとを見別付かず、又もや喉は先刻に倍して渴を慰せん

飲料なく、多年辛苦して貯藏せし金品證券悉く失ひ、便とする妻は見當らず、其の生死さへ詳かならず、只だ茫然黙然として天に輝ける赤火を詠むるのみ、所謂自失呆然とは此事、如何にも渴に耐へ兼て彼方此方に水を求め、宮城前に配列せる蒸氣ポンプの水管より水の漏るを見付け、倉皇走て口を付け、僅かに渴を癒し、稍や蘇生の思をなし、ふと心付きたるは、舊主人の身の上、池の端に同業を営み、資産は豊富なれど大主人は中風にて二三年この方半身不隨、言語不明の儘ま床に臥し、惣領は蕩樂で家を明け續け、二男は低脳、三男は未だ中學生、利三郎さん極めて忠實の人で、池の端の御主人は如何なされしや、あの御體で御内儀さんは體も弱く、番頭若衆も昔しとは事更り、利己自慾に汲々として居る連中ばかり、嘸ぞ御難儀を成され居らん、「これはコーしては居られぬ」と、直様心を取り直し、一目散に人や荷物をかき別けて、池の端の丸屋利兵衛方に走せ付け見れば、案に違はず、若主人は湘南地方へ行きて不在、家内は狼狽の最中『私は人形町の利三郎で御座ります、大變な事になりました、御内

儀さんあなたは末の坊チャンと、御次男様と御一所に、上野の方へでも又目白の御親類へでも御逃げなさいまし、私は大旦那を引受けましたから』と云ふと内儀は『利三郎や御前が来てくれ、ば、此の家には千人力、ドーゾ大旦那様と金庫の物と御用筆筒の内にある證券や銀行通帳、地所家作の書付け又は寶石金白金の高價の物丈は是非頼みますよ、店の品物は番頭若衆に任せても、其丈は屹度御願ひしますよ』『エー宜敷御座ます、必ず御心配御無用です、御引受致しました、あなたは早く御二た方と一所にはぐれずに御用心して御逃げなすつて下さいよ』と云ひ遣し、右の重要品を二包とし、一を自分が確と帶し一を携へて大主人の病床に至れば、大主人は前に申た様に半身不隨言語不能で只だ左手を少しく舉げ、利三郎を拜むが如く中氣病みの常として感涙を流し、口をもぐ々々する斗りなり、利三郎は『大旦那様、大丈夫です、御安心なさいまし』と一の貴重品入の包と枕邊の藥瓶と側に在た小袖を一所にして大主人に負わせ自身は大主人を引起し、小供を背に負ふ如く、側に取り散らせる帯にてしつか

りと荷ひ『サー参りましょう、番頭さん、若衆方、御店の方を何分御頼み申します』と云うても、最早でんでんばら々々勝手に逃去り、年老ひたる愚直の白鼠番頭と他一二名の小僧あるのみ、其れを見捨て、外に出れば火は渦巻してあたり八軒焼盡さん勢ひ、只だ僅かに目白の方に避難するより途なく、殊には病主人を野原に寝かす譯にもならず、と勇氣を鼓して目白の親屬へと志し、韋駄天走にかけ出せど、自身も今迄散々に疲れた揚句なり、背の病人は中氣病にて「グンナリ」として、袋に入れた米と申ソーカ、氷枕を百も負た様に更に背の方で梶を取て呉れるでもなく「デロ々々」何か背の方で云ふ様だが、火急の場合一々取り合ても居られず、人馬の混雑は名狀す可からず「ダラ々々」腰の方に下て来るを、酌ひ上げ々々駈出して、丁度江戸川邊まで來ると、背の方で「デロ々々」云ふ様子もなく、同じグンニヤリでも、今迄は自身の左の肩のあたりで手を動かして居るようだったが、其れも静まり、まさか此の騒の中で赤ん坊でなし眠たのではなからうし「變んだな、様子を見たい」と思ても、身には大

鎧を擔だように帶でしつかり縛り着て荷物を附帶せることとて、此の骨なし動物見た様のものを今途中で下ろして又負ふは大變な騒ぎ、今少しだと尙ほも心を勵まして、目白の親戚鈴木某に到て、自分の身を投げ込む様に玄關に大呼して『池の端の大旦那様を御連れ申しました』と叫べば、奥より一同出迎へ、又丸屋の内儀や二男三男も出迎へて『利三郎や難有御座りました、御蔭で助かりました、實に御前さんの忠實は今に始めぬ事ながら、生々世々忘れは致しません、兼三郎（三男）や御前もよく御禮を謂て御くれ、利三郎殿すみませんでした』鈴木家の一同も『いや利三郎殿、御前さんはいつに變らぬ忠實心切な人、丸で地震加藤の様だネ利三郎は『恐れ入ります、マーこれで私も安心致しました、時に大旦那様を下ろしてあげて下さいまし』と帶の縛り目を解き人手を借りて、やつと下ろせばこは如何に、病主人の擔たる荷物の金白金寶石薬瓶小袖等の包みが肩をすべり落て、咽喉を約して呼吸は絶へ、口より泡沫を流し、眼は上竄し、はやこと切れとなり居るにぞ、あつと一聲叫び

たるまゝ、利三郎も重て二度の失敗にやゝ失神の状態となつて卒倒し、丸屋内儀親子は屍體に取り付き泣き喚び、鈴木一家の者も默然聲なく、二男の低脳がニヤ／＼笑ひ只だ秋の虫の名残を惜みて、悲しく鳴く音と、人間を呪咀する様な物すごい月が庭前に輝くのみ、

狂言

栗拾ひ
(二席)

緒 言

余が藏幅の中、谷文晁の栗の枝の圖に、岡本花亭の賛あり、其賛に曰く、外面夜叉愼怒相、滿頭毛髮堅如針、内藏菩薩心とあり、偶然余筆を執て此の戯曲を作る、

栗 拾 ひ

太郎冠者、某は夢の里に住む宇都太郎と申す者で御座る、某も此の年で御座るに依つて妻を娶らねばならぬが、世間の者は美人々と、只見目好き者を望むなれど、夫婦は一生の大事なれば、顔形などは何れでもよし、心の直ぐなる菩薩のようなる妻を娶らんと存じ、此の程より出雲の御社に誓願の込め、今日は滿願なれば是れより參ろうと存ずる、先づそろり々々と參ろう……あゝ、好い天氣かな、小春長閑けき秋の日に、彼方の空には白雲たなびき、此方樹々には紅を染め、山は青く水は白し、一段と好い詠めやな……イヤ何かといふ中に、これは早や出雲の御社へ參つた、先づ願を懸けよう、天清淨、地清淨、内外清淨、六根清淨、何卒御社の大神、此の宇都太郎に心直ぐなる妻を娶らせ給へ、

「太郎冠者が柏手を打つ後より次郎冠者、頭を被り物にて掩ひ僅かに顔を現し」
次郎冠者「謠ひ」夢の浮世に夢を見て、夢がうつゝうか、つゝが夢か夢路に歸る夢の里

「此時太郎冠者後を顧み次郎冠者の謠を聞きて」

太郎冠者、ヤ、あれは何やら申して參る、何を申すか承らうと存ずる、

次郎冠者、「頓着せず獨り言」あれは外面は夜叉のようなれど、内心は菩薩じや、誠に
好い味合がある、あれ程澤山あると思はなんだが、毎日取りに行つてもまだ中々
取り盡せぬ、其れを存じて居る者は、神様と某がし斗りじや、彼れほど澤山あ
つては、某一人にては中々片付かぬが、誰ぞ望むものあらば教へてやりたいもの
じや、

太郎冠者、「獨り言」これは如何なこと、今日た満願の日なるに因て、御社の大神我れ
等に好き望みの妻を授け給ふ、其の御使しめでがなあらう、尙々此の者の後に就
て參らう、

次郎冠者、參る程にそろ／＼内心如菩薩が見へ給ふ、今日は一段と肉付きが好ふなつ
て參つた、

太郎冠者、「伸び上り窺ひ見て」吾等人間の眼には何にも見へぬが、神の御使し者には
何か有りありと見ゆるそな、あら腹立ちや／＼、

次郎冠者、此の邊りには人もなし、燃き火でもして用意をしようぞ、ソレ／＼外面は
如何に憤怒の相を致して居ても、少し温めてやれば夜叉の相は取れて、地味な皮
衣、濫い薄衣、其れさへ脱げば大慈大悲の姿、ヤレ待ち遠しや行て取て參らう、

太郎冠者、「立ち現れ」いや、まをし／＼、

次郎冠者、ヤア／＼こちの事で御座るか、何事で御座る、

太郎冠者、なか／＼、某最前より御後に就き従ひ參つて御座るに外面如夜叉、内心如
菩薩の澤山おわするよし、某何によりの所望に御座れば、何卒一つ某に賜り度う
御座る、

次郎冠者、其れは安い事、行て取つて參ろうが、御身は此の所にて火の消ぬよう、心を付けておりやれ、

太郎冠者、畏つて御座る、温めねばならぬとのことはしかと心得て御座る、餘程女は冷へ性と見へる、

次郎冠者、「出て往き獨り言」扱ても扱ても數寄な人もあるものかな、某が栗のことを申して御座るを、渴仰してねだり居たが、如何に嗜きでも、彼の栗林に實り居る幾分もたべらるゝことではあるまい、

太郎冠者、「燃き火の火を煽ぎながら獨り言」信心の功德に依つて、好き人に出逢うて念願も叶ひ、家内安全、家業繁昌、あり難や、難有や、總じて面好き者は己れの器量を鼻に懸け、我儘贅澤、少し小言でも申をものなら、うのぼれから『此の家斗りに日は照らぬ、又あの様な男は簀を蹴つても五人や七人は蹴出す』杯と、夫は箕にすくうて捨つるようにあると思つて『別れよう離れよう』など々申すい

やはや沙汰の限りで御座る、昔し孔明は、好で醜女を娶たとか、面醜き女は心やさしく、自らの面に耻て、家や夫を大切に思ふこそ、家の寶とも成るとのことです、御座る、

次郎冠者、「栗を籠に澤山採り負ひ來り獨り言」最前の人の御所望に依つてしたゝかに採り申たが、中々重い事で御座る、早く參つて馳走しやうと存する………これは御待遠うにあらせられたか、

太郎冠者、是れは如何なこと、御蔭を以て宿年の望みをとげ申す、何と御禮を申してよいやら、

次郎冠者、御所望と承り數あまた荷ひ申して御座る、

太郎冠者、「周圍をきよろ／＼見て」してその女菩薩は何處に御わしますぞ、

次郎冠者、この籠の内を見させられへ、

太郎冠者、ヤツ是れは栗、「あきれて茫然」

次郎冠者、中々「籠の内より栗を取出し」火中に投じ斯く温むれば夜叉のとげは取れ申す、「とげの脱れたるを持ち」扱ても斯様に皮衣濫き薄衣を除き給へば、中身は如菩薩聞し召したが宜う御座る、

太郎冠者、「憤慨して」是れは如何なこと、外面夜叉、内心菩薩とは栗のことであつたか、腹立や腹立や、懲らして物見しようとは思へども、某にも疎忽の罪もある、次郎冠者、是れは不思議の奇遇かな、人と栗とは更れども、互ひの望みは内心如菩薩「太、次、共に謠ふ」

實にや悟れば同じ道、有情も非情も其の心、皆な之れに洩るゝ事ぞなし、

太郎冠者、妻や妻や如菩薩

次郎冠者、栗や栗や如菩薩

狂言

孟

宗

(一席)

「名乗座に立ちて」『罷り出たる者は、此のあだりに住居致す、孟宗と申す者で御座る、去年の秋より、母人が煩うて御座るが、大法、祕法、醫療さまざまの験しが御座つて、此の程は漸々心地能う成らせられては御座れ共、未だお食事が進ませられず、色々の物を參らすれ共、更に口になされた事が御座らぬに依つて、ほとんど迷惑致すところに、今日ゆくりなく『筈が欲しい』と仰せ出されて御座る、此の寒中に、何所へ參つても有りやう道理は無し、扱々困つた事で御座る、何と致そう、イヤ、思い出した、致し様が御座る、是れとても人間業には參らぬに依つて、日頃信心の、觀世音菩薩の功力を頼み、御授けを願はうと存する、さらは用意を致いて參らう」と後見座にて見拵らへをする」

「一の松邊に立ちて」『ア、降つたる雪かな、野も山もみな白妙の銀世界じゃ、ハハア、降るはくく雪に鴨を煮て飲んで散財し、鯉はこくしようにして食べて満腹すと云へり、扱もくく羨やましい事哉、思ひ出いても喉がグビく致いて參つた

イヤ来る程に、観音堂のお前へ参つた、いつ参つても、森々とした殊勝なお前じや、さらば拜を致そう「型あり」

『南無や大慈大悲の観世音、何卒御佛の功力に依つて、此の孝子孟宗に、筭を授けさせ給へ、夫れ観音力はあらたかにして、具足神通力、廣修智方便、南無觀世音大菩薩、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

さらば篁村へ参ろう、ア、寒や／＼、切りに吹雪が致す、チト謠うて参らう、

『先づ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木より先づさき立てば、梅を切りやそむべき、見じと云ふ、人こそ憂けれ山里の、折かけ垣の梅をだに、情なしと惜しみに、今更薪になすべしと、かねて思ひきや』

「イヤ、何かといふ内に早や竹藪へ参つた、さらば此のあたりから掘り出して見ようヤットナ、ヤットナ、さればこそ、有つたぞ／＼、是れも觀世音薩埵の功力で有らう、扱て有難い事じや、ヤットナヤットナ、／＼、／＼、これは根の深い事じや、エイ／＼

ヤットナ、是れはいかな事、筭じや／＼と存じて御座れば、不思議な事もあればある物で御座る、竹藪から大根が出た、是れは先づ何とした事かしらぬ、オ、それそれ、是れも家土産ツトに持つて歸つたならば、かうこうに成ると云ふ事であらう、笑へ／＼、ウウハツハツ、、、、、「笑ひ乍ら退場す」

科學と藝術

科學と藝術

醫學上より見たる劇

A、生理的動作

1、舞踊

舞踊には能樂五流、狂言三流の外、藤間、花柳、西川、坂東、片山、山村、吉村、井上、等を初めとして八九の流儀あらんも、要するに舞踊なるものは、醫學理學を基礎として説明す可く、先づ單簡に其の定義を下せば、

臍部を中心軸として十字架運動回轉運動を行爲する身體諸關節の柔軟なる、表情動作を謂ふ、

是れは世界何れの所何れの舞踊にても、此の意義に外ならず、而して其巧拙は中心軸の確實と諸關節運動の剛柔の働作に比例す、學理上より謂へば、物理學の力學及立體幾何を以て説明す可きものにして、直立、斜立、伸縮、横曲、旋回、屈撓等種々の形態を表現するも主として中心軸を根とし、肩股、關節を幹とし、頸手足を葉とするものにして、竹柳の微風に枝葉を動かし、大風に幹を動すが如く、是れ其の根たる基礎の確固たるに外ならず、鶴鷹の大空に舞ひ、鷺雁の片趾に立つも、夏夜燈前の虫が種々曲藝的働作をなすも、其の中心と周圍、即ち根幹枝葉の働作意義を謬らざるにあり而して舞踊の種類異なるに由て、元より臍部を中心とするも、頸を主とするあり、手を主とするあり、足を主として働作するあり、例之は雪月花の所作に鷺娘が頸を主として、漁師が手を、奴が足を主とする如く、然れども臍部を中堅とせざるの舞踊は、肩股、動搖し手足運動美麗ならず、強て之れを矯正せんとせば、臀部稍々後方に突出し、所謂屁放り腰となり、前面側面より之れば、美麗なる如きも、後方より之れを窺

へば醜形と謂はざる可からず、嚴密の意味より云へば、舞踊は裸躰乃至紗羅を着衣し「カツラ」を被むりて踊れば、眞の形を知るを得可く、昔へ能又は謠の稽古は裸體に烏帽子を頂き肩上に水を盛りて、謠ふたりと謂へり、

人々長短あり肩の美なるもの、腰の美なるもの、頸の美なるもの、手足の美なるもの千差萬別なれども、悉皆其の美を具備せざれば、名人と謂ふ能はざる可し、猶又山とか川とか切るとか切られたとか云ふ形體的表情は、能く之れを表現し得ると雖も、花とか月とか雪とか尙一層困難なるは、心理的働作、例之は智情意等の表現は實に微妙の演出にして、今ま假りに聾啞の人ありて、其の舞踊を見て其の表情の顯れを知ることを得せしむるとせば、至難の事なりと謂はざる可からず、余嘗て道成寺に於て初夜の鐘に諸行無常、後夜の鐘に是生滅法、晨朝に生滅々已、入相に寂滅爲樂なる謠を如何なる表情を以て舞踊に現すやと問ひたることあり、

亦た踊が謠を殺すことあり、例之は石橋の獅子が毛を振るに、臍中心及腰回轉運動を

以てせざれば、只頸の回轉運動に努力するも、見事に振り能ふものに非ず、獅子團亂旋とは白獅か紅獅を逐ひ廻す形にして、元來石橋の曲は能樂に出發す、其の作意は大江定基出家し、寂昭法師となり入唐し、清涼山（五臺山）即文珠師利の菩提寺に修業し、煩惱を棄てざれば菩提を得ず、即ち千仞の深に投棄するは、煩惱を解脱せしむるなり、佛は正仰して臥するを涅槃座右側臥を獅子座、獅子座とは右を下に臥するの意なれば右腕を頸に當て左足を前に延ばして、右側に肘枕をするの意、左側臥を無明座と云ふ解剖生理學的に考へても、然る可き事にして右臥は食物を十二指腸に送るに便、左臥は胃底に食物を停滯せしむるが故に夢を見る之れ無明なる當然の理なり、

2、視勢と表情

人類の智慧、善惡、喜怒、哀樂を察知するは、其の人の眼と口なり、眼は其の主役にして、口は副務なり、口如何に開くと雖も、笑ふに非ず、喜ぶにあらず或は口を鎖す

と雖も悲むにあらず、怒るにあらず、誠に眼は主にして、口は副なる働作たるは、各人自ら試みて之れを知るを得べし、

昔より眼が口程に物を謂ふと云へり、支那にも、唐昭宗皇帝の時、目語と謂ひて幕中伏兵あるを目示せると云ふことあり、五代史に唐昭宗東遷す、韓健從て洛に至る、昭宗酒を舉て太祖に屬す、健太祖の足を踏む、乃ち陽に酔て去る、健出で、太祖に謂て曰く、天子宮人と眼語して而て幕下兵伏の聲あり、恐くは公免れざらんと、然れども余は其餘程以前より目語なるものはありしと思ふ、則ち鴻門の會に、茫增が頂莊頂伯に目語して漢高祖を刺殺せと目示せしことあればなり、而して眼の如何なる働作が如何なる表情を現示するか、

眼の働作に二つあり、一は眼瞼運動、一は眼球運動、是れなり、其の眼瞼運動は副務にして、眼球運動主務なり、即ち如何に眼瞼を開大しても、憤怒を表現する能はず、如何に狭細にして喜も笑を表示する事能はず、是れ副働作なり、

然り人生感情の表證の根本となるは眼球なるは疑ふ可からざる所なれども、之れ眼内屈折機の働きにあらず、瞳孔の開縮にあらずして眼筋の作用なり、其の眼筋の作用とは眼球に附着せる外筋の弛張と眼球の轉向位置なり、其の筋の緊張は智而敏に弛緩は愚而鈍、怒れば眼筋緊張、眼裂開大、眼球不動の姿勢となり、笑へば眼筋弛緩し、眼瞼狭細外皆部に皺襞を現す、

余嘗て、畫工に喜怒の表現を畫くを問ひしに、紅を以て外皆部尾部、の上方に向て二三の皺襞を畫き、又鼻翼部に口角の兩側に向て、頰令の部に深大の皺襞を畫き又口角の上方に赤線を畫けば、喜笑の顔となり、烏睛を點するに、之れを大にすれば穩健に小にすれば、鋭強に見ゆ眼瞼外皆を上向し瞼縁黒を畫けば怒顔兇惡となる猶眉毛の上或は下向は其れの補助なりと、

總て筋力の弛張は感情及情勢を表現するものにして、喧嘩の場合に袖を捲り、肘腕を露出し、膊肘筋を緊張せる、挑戰的態度を示す如く、膊腕弛緩せば、戰敗者、怯懦の如く、或は麻痺患者の如し、皆是れ膊腕筋の緊張弛緩に因るものにして、頸筋に於ても弛緩せば怠慢疲勞虛弱を示し、緊張せば威儀嚴正亢奮せる如し、之れを以て緊張は積極的にして、意氣の昂騰を示し、弛緩は消極的にして、從順無抵抗を示す、是れ敢て人類のみに非ず、諸動物の働作を注視せば哺乳動物より爬蟲類昆虫に至る迄、日常之れを目撃する所なり、豈敢て筋肉のみならず、精神の緊張弛は人生興廢浮沈の關する所なるべし、

眼球轉向位置、吾人が内斜視患者を見て怒氣を含むが如く、外斜視患者を見て人を窺ふが如く、愚鈍なるが如く感ず、

孫吳の兵書を見るに、天眼の敵は撃ども敗せず、地眼の敵は撃てば敗すと記す、天眼は眼球を上方に轉向し、(上直筋下斜筋)抵抗不順の意を表し、地眼は下方に轉向し(下直筋上斜筋)即ち歸順服從の意を現す、之れ三千年も昔より識者の諒知せる所なり、然れども下向視すると同時に、左右に眼球を轉動するは、陰謀詭計を含む者なり、談

話中眼球の左顧右眇、恰も震盪症の如く、不穩に運動する（キヨロク）は、秘察野心、恐怖、警戒、輕卒等の感想を表示し、之れに反し、内外轉運動の遲滯せるは、疲勞、落膽、無氣力等を表示す、又談話中上下眼瞼の微細の開閉運動を爲すものは、其の時眼球の位置多くは上方に轉向す、（ベル氏現象）如斯は秘密、恐怖、狼狽を表示す、酩酊の時は眼球稍上方に向ひ、心配事ある時は、下方に向ふ、人を睥睨する時（ニラム）は左右眼球共に右方に向ひ、秋波を畫く時は、兩眼左方に注視す、之れに反し右に視線を轉向しても秋波を畫き難く、左に轉向しても睥睨には感じ難し、但し右方に轉向して、秋波を表示せん場合は、不完全ながら眼瞼を細狭にして之を補足す、以上は元より精神諸感の發動に困て眼筋及眼瞼に其の働作を現示するものなるは、注意實驗せば首肯する事を得べきも、然らば如何にして精神感動に因て眼筋に弛張轉向を表現するやと云ふ理由は、其の説明至難なる事なり、此れは精神生理の進歩して、腦髓各部所の精神的機能を證明するを得るに至らざれば確答する能はずと雖も、余が

研究に因れば、腦髓左右半球の働作機能は同一ならずして、右半球は自働的に左半球は他働的に機能するものと考思す、例之は右視は睥睨に宜しく、左視は秋波に適するは、睥睨は顛頂後頭の左半球の働きにして、他より不快の感を與へられたるより怒氣を現せるものにして、即他働的被働的なり、秋波は後頭小腦右半球の働作にして、自働的なりと謂ふ可きか、喜怒哀樂皆な腦髓を基として現はるゝは當然の事なり、銃をねらうは兩眼の左轉にして自働的なるなり、視神經、動眼、外旋、滑車神經等の眼運動に關する中樞神經核は、大腦脚の兩側に配列し之れが纖維は腦内に於て交叉をなす故に右視は、左中樞核、左視は右中樞核の働きなり、其他身體兩側に具有せる臓器、肺、腎、辜丸、卵巢、手足其の機能皆な此の理に因由するなる可しと思意す、而して喜笑の表情は前陳の如く、眼球筋は緊張することなり、只眼瞼の狭細魚尾の皺襞口の開大頬令の深溝等を以て表示するものにして是れは人類獨特專有と謂はざる可からず、怒憤涕泣は高等の動物も之れを表示するを得と雖も、喜笑の表情は類人猿に

之れを見ると謂ふ説を唱ふる人あるも確的のものにあらず、右視、左視の場合に口を開く（口角を少く開く）場合は陽性口を閉塞する場合は陰性の表情を出現す、戀慕の情、注視、耽睨、喫烟、亦持物、（帽、杖、傘等）の持方と勢視の關係により諸表情を出現す、

B、病理的働作

1、盲人及視力消耗

盲人も多種にして、産生後直に失明するものあり、十年廿年卅年前に失明せる者あり昨今失明するものあり視力減退消耗して行動の自由を缺く者あり、其の盲期長短及視力の比較に於て差異なかる可からず、然れども劇中其差異に就て明瞭を缺く、

A、胎内或は生産後直に失明するものは天地間萬物の形體色彩更らに知ることなく、

所謂群盲探象と謂ふ可し、只だ他人の話に由て之推知し想像するに外ならず、故に醜美安危は其真相を自知せるにあらず、此種の盲人は尤も多く琴彈などに見る處にして他より之れを見れば、長揖して靜かに歩し眼球を回轉し多く外斜の狀を呈し運動しつゝ、徐に杖に依て歩行し禮をなす時は顔面を側向して拜す、

B、數年、廿卅年前に失明せる者にして、一度天地間の萬物の何んたるやを諒知せるを以て、醜美、安危、恐怖、驚愕を認識せるが故に、其明を失ふたる代償として耳或は鼻を以て之れを諒察探知せんとして、或は顔面を上向或は側向して嗅覺又は聽覺に由て追想認識せんとする者也、失明の年數と其の人の感覺の鋭鈍に因るとは雖も、所謂演劇にて多く見る盲人の形態にして即ち足の爪尖探り、顔面の側向及び杖先きの瀕探、猶直立姿勢の時は身體の上部は後方に、腰部以下は前方に突出する働作をなし、座する時は手先にて瀕りに探模し、挨拶をなす時は手が頭より前きに出て、顔面は側向す、

C、昨今即最近失明せる者にして此の状態を知らんとせば、自ら暗夜無燈の時、立て物を探るを試む可し、即ち頭部を前方に下向し、顔面は下向し、手掌を擴げて頭部の前方に差延ばし、腰は稍に前方に屈し、足趾は席を摩す、

以上盲者の表情は眼其要を爲す能はざるが故に、眉口等が働き、眼は只だ左右或上下働をなすのみ或は眼球上舉運動をなす、邦劇の盲者は多く、眼瞼を閉鎖し或は眼瞼開閉運動をなす者多し、外國の劇又は映畫を見れば、盲者は多く眼瞼を開放し、盲者の態をなす(街の灯)盲の飛行機、而して盲となる病は

(A) 眼閉鎖者

- 1、眼球勞、全眼球炎、膿漏眼、角膜乾燥等
- 2、無眼球
- 3、小眼球

(B) 眼瞼開放者

視神經消耗
 綠内障
 白内障
 黒内障
 硝子體疾患
 視神經
 網膜
 脈絡膜
 角膜

病

是れに由て考ふれば盲者の大部分Bに多き理、眼球勞の不體裁の眼球を所有する、盲者にして二種あり

一、は開眼の儘盛に眼球の廻轉運動をなす者、

二、は閉眼する者、

一は多く先天又哺乳兒時代失明し自らの不體裁を知らざるもの、

二、は後天に失明し自身不體裁を知るか又神經質の者なり

余嘗て全國盲人大會に出席せしことあり其議事を開催するや喧々囂々互に罵詈訕笑或は怒號して到底健康人の想像の及ばざる處なり、元來盲人は頑固、猜疑、自我等の心強き者なり。

D、夜盲は劇中尤も多く登場する者なれども、夜盲なるものは太古より存在せる病症にして、西洋では「アツシリヤ」「バビロン」時代より其の記載あり、此の症は原因に二ありて、一は營養不良より起り、一は腦性のものなり、此患者は既に失明に陥るものは絶對盲なれども経過中の者は盲に非ずして視力の消耗なり、即ち暗くなれば視力を減退するも明所にては否らず、劇中の夜盲は多くは後ちに恢復するものなれば全盲には非る可し、只だ朦朧として判然識別し難き程度なり、此の

患者に劇では酉の年月日時揃ひて生産せる人の血を飲ましめて開明すると謂ふ事の作意は面白き事にして、古より鶏の肝臓を妙藥として今日も猶療法に適用するものなり、去りながら鶏肝又は鶏血を服用したればとて直ちに開明するものにては非ず、若干時日持續して用ひされば功を奏せず、

E、其外、劇中赤き絹布片を以て、眼を拭ひ出づる場合あり、例之はお俊傳兵衛の母の如きなり、是れは眼より分泌物あるを拭ひ去るの意なれば、結膜殊にお俊傳兵衛母の場合は（トラホーム・パンヌス）及黒目の病と思意するものはお靜禮三（角膜病）フリクテン又は實質炎、澤市は胎生後風眼、或は乾燥症、朝顔は、ヒステリー性黒内障或は眼球外視神經炎、是れ又絶對の盲にては非ず、比較的視力減退消耗なり以上D、Eの場合は手及足にて摩觸して察知し、眼は窺ふ如くにして、頭を少しく下向して視察するものなり。

元來劇には半盲は少く全盲多し、而、其病症を推測するに上記の如く半盲多し、故に

比較的盲者の狀況ならざる可からず。

2、毒 死

洋の東西國の南北を問はず太古より數多く用ひらたるは砒素（亞砒酸）にして之れを礬石と稱し、亦鳩と云ふ、鳩とは此の毒のある所には飛鳥をも沈むと謂ふ意より、此の字を爲す砒素は無味無臭無色なる故に他の毒藥の如く味臭色なし以て適用に便なり此の毒の急性中毒は、頸部絞搾、渴、腹壓迫及痛（胃腸）惡心嘔吐頭痛眩暈、失神下利出血、振顫、呼吸困難痙攣昏睡、亞急性又慢性中毒は胃腸カタル榮養障害、出血、貧血、多發性神經炎、黃疸色素増殖、麻痺、（清正を毒死なりとせば之れに準す）次に用ひたるは鳥頭へにして内服又は箭尖に塗布せしなり、

中毒症狀は、皮膚搔痒、灼熱、刺痛、呼吸困難、發汗流涎、痙攣、麻痺、
 芫菁^{ハンキョウ}、一匹半にて死するも輕量には催瀉藥として「ヨシンビン」の如く用ひ、又生毛藥として用ゆ、中毒症狀としては嘔吐、下痢、頭痛、眩暈、呼吸困難、躁暴狀、痙攣麻痺、其外蛇毒、蝎毒、河豚毒を用ゆ、
 印度大麻、眩暈、躁暴、痙攣、脫力、
 罌粟（モルヒネの原料）麻酔、心臟麻痺、
 以上劇中の服毒は砒素中毒を標準せば可ならん。

3、負 傷

負傷には自働的と他働的即ち加害と被害あり、其の負傷の部位、輕重、大小、緩急ありて甚だ多繁なり、然れども相互對向せる状態と背向せる場合とは負傷の部位相異り亦た負傷せしむる武器に因て異なる可きも、大別して

打、切、傷、雉切傷、刺傷（銃も之れに屬す）と區別す、打切傷は、被害者の左方に、雉切傷は被害者の右方に、受傷す、但し背面よりする時は此の正反對なり、受傷の輕重緩急は大略して申せば、内臓頸部の負傷は重且急、四肢肩背は其の大小に因ると雖も概して内臓に比して輕且緩なり、と雖出血の多少により輕重あり、

4、病 態

諸種、にして枚舉に違あらざるも劇中の病は多くは、跛、肺勞、瘧（マラリヤ）癩病、熱病、手くね（切創後又は關節病）聾、啞、狂人等なるべし、

A、跛、は尤も多く劇中に見るものなれども、是れが股關節病か、膝關節か、足關節が病あるやは、劇中其の證定に苦む、如何となれば病股關節なれば、膝、足關節は健康なるべく、病膝關節なれば股、足關節は健康なるべく、然るに大晏寺堤の跛や、跛り勝五部は何れの關節に病あるや詳かならず、亦各俳優により其病が股關節に有る様

にも見へ亦た膝關節にもある様にも見ゆ、

B、肺勞、或る俳優は咯血と吐血の區別を識さる者もあり、咯血は肺出血にして咳嗽を伴ひ吐血は胃出血にして嘔吐を伴ふ、此症は精神は明瞭なれども衰弱せるものなるは日常諸人の實見する所なり、

C、瘧、とは今日の間歇熱にして、發熱は惡寒、戰慄以て始るも經過すれば健康人の如く、

D、癩、には獅子癩、斑紋癩、神經癩等、あれども劇中には其の別を要せず、此症は神經麻痺と皮膚知覺脫失を主とし眼に來れば終には盲となるも多くは死ぬ迄は半盲の状態即視力消耗減退なり、

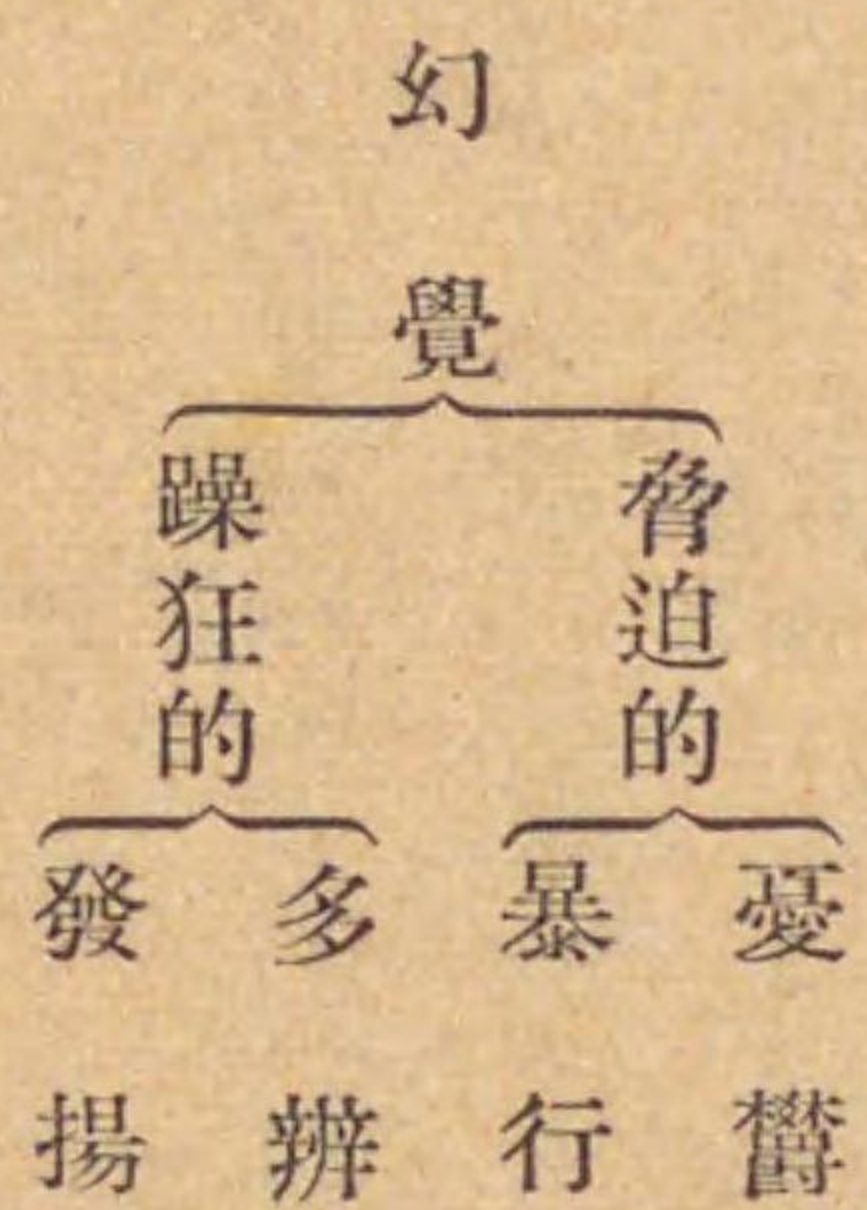
E、熱病、説明迄もなく種々の熱性病あるも、大概頭痛、頭重、倦怠を伴ふものなるは人の知る所なり、

F、手くね、是又説明迄もなければ健肩は病側より上聳する習慣となる、

G、聾啞も亦説明の要なしと雖も盲者の耳鼻を代償とする如く、聾啞は眼を代償として諸方に注意す、

H、狂人、是れは劇中尤も大切なる俳優の働作にして藝術實施の上よりも至難なれども、説明も亦た至難なり、如何となれば狂人の種類千態萬様にして、憂鬱症あり、躁暴あり、白痴あり、躰質性神經衰弱あり、半狂あり、色情狂あり、變態者あり、各混在するありて、各箇の説明困難なれども概して劇中の狂人は親子愛又は戀愛貧苦、恐怖驚愕より起る狂者なれば、半憂鬱、半亢奮の状態なるヒステリー狂又麻痺狂屬のものなり、是れが又或る動機にて健康に恢復するものなるが故に一層説明困難に陥り眞の狂人は多くは終身病にして又恢復するとしても長時日を要する者なり、劇中の狂人の如く一時性のものは何種に屬するや、多くは高度のヒステリー又神經衰弱に屬するものと考へざる可からず、

其病性の詮議は扱て置いて、概して一般狂人の働作に就て述べれば、眼をキヨロくし又たは足を引摺る丈にては要領を得難く、故に笹の葉を擔ぎ鉢卷などして是れが補足とするならんが、醫學上より申せば狂人即精神病者は働作に持續なさものにして、不理解又は半理解なりと謂ふ可きか、例之は物を人に手渡しするにも未だ合手の受取らざるに先て之れを放棄し、又た空にして無物なるも實體視す、之れ幻聽幻覺幻視あるが故なり、結論より申せば錯覺幻想を主とする者なり、



4、音樂と舞踊

我邦にては殆んど獨創の樂器なく皆な海外より渡來せるものなり其の渡來の經路に付

ては、

一は亞弗利加ペルシヤ印東方面より、一は歐羅巴方面より、一は支那朝鮮より來りたるものにして、世界何れの國も樂器の始りは吹く物（蘆笛）敲く物なりホドギ瓶の大小を連ね又木桿等を連ね打つ佛寺にては木魚を打つ、

木魚は恒河に棲む魚か、毎夜悲鳴を叫ぶを釋迦之れを見れば魚頭に木が生茂し風の吹く度びに動搖して苦むを知て功力に因て之れを除去せしを魚が感謝して、其の木を獻じたるを釋迦は其木に魚を刻し讀經の句切れに打ちしなり。

次て彈く物を發見せることにして吹く物即ち簫、簞、笛、打つ物、羯鼓、太鼓、鼓、類等は支那より朝鮮を經由して來り、彈く物、琴、三味線類は西洋より支那印度を經由て來る、例之は

三味線、は「アシシリヤ」に始り支那に來て蛇皮線となり、日本琉球に來て猫皮三味線となる「アツシリヤ」時代には小羊皮を張付し彈子を要せず、歩行しつゝ彈奏す。

日本に三味線の渡來せしは、足利氏の末世にして、初め琉球に來り、蛇皮破れたるが故に琉球産蛇皮を用ひしに、南清の蛇より皮薄くして直に破れたる故に、猫皮を用ひたり此時の三味線を彈く様子は、彈子を用ひず指爪を以て彈奏し、極めて單調にして初め琉球より九州に入り、大内大友尼子原田の豪族が之れを玩するに至り、次て山陰山陽より京都に入る、此時分に到ては琵琶を彈する如く一歌一彈なりしが、秀吉時代に到て、地歌の體を具へ、出雲お國之れを演劇に他の諸樂器と共に適用するに到て大進歩をなす、而徳川氏中世より、分派分流續出して今日に到る。

琵琶、琴、は奈良朝の時代より支那、朝鮮を経て渡來せしものならんが、之れは敲くものより變じ來るものにして「ピアノ」の如きも羅馬の末世に「ハーフ」と木琴より變化し來りしものなり。

總て文明は何物かを創立すると次で新案となり、分裂するものなるは歴史が證明する所にして、我邦の音樂界も此定則に外ならず、先づ創業者の作曲作歌を次ぎの者は他

流の好き所を盗て調合混和する、又た其成分が創始者の物に縁遠くなれば分裂する、此故に古昔の物は廢絶し又新規の物が勃興す萩江、蘭八、富本、河東、等は殘骸を留め長唄も本來の「メリヤス」物は不流行となり、清元化乃至常盤津化となり、清元常盤津も又變化す、元來長唄其外の曲物は皆な演劇を根本として伴奏の物なりしに近來は伴奏が主となるも世の變化なり、甚しきに到ては伴奏者が自箇本來の本分を忘れて自箇の聲量に誇て勝手に伸縮し、或は彈絃奏を妨ぐるに至るは愼まざる可からず、伴奏者が斯の如く亂脈なるが故に雁笛、虫聲、蛙音、まで往々亂脈なるを見聞するは遺憾なり。淨瑠璃の起原は彼の美聲なる瑠璃光如來より始まり淀君の時淨瑠璃姫と義經との事を作曲して今に残る。説教節様の物を作り、敘情的に琵琶の軟化せるものを作りしに基因し、由來之れを演劇の主伴奏なるものとせしが、次で常盤津を創始し一層之れを軟化し、二番目狂言物を作製するに至て富本河東清元次で新内等を用ゆるに至りしが、一番目物には之れを適用することなく、從て演技者も其の型に合致する行働をなすに至

る故に今反對に義太夫物に清元常盤津を以てし、清元常盤津物に義太夫物を以てせば極めて不調和なる物ならん畢竟するに伴奏なるものは演藝の調和節度を司るものなるは明なる理なり、其外琴曲物などを用ひ又合手物を用ひて演技上其の拍子を調和するものなり、古曲に俚謠を巧に適用せる例は幾多ありて例之は長唄の安宅松に「ちいちやこぶしや桂の葉、なる文句あり。

此れは古へ北陸道には兩拳合（元來支那語にして九州に渡來し九州語癖に轉化せるもの支那語にてはリヤン、ケン、ホーなり）を遊ぶ時に、ちいち（ひいらぎの葉）こぶし（花か、拳か、）桂の葉（手掌を擴げたる形）と云ふ恰も江戸にて、散輪、咲、（ちいりいさい）と同意味なり。

或は越後獅子に朝さ夜度の句は、おじや地方にては、冬は爐邊に上布の麻を捻り或る撰るの意にして之を朝暮の意味に引掛けしなり。

如斯類例を枚擧すれば實に限りなく、茲に一二の例を擧ぐるも、昔より名曲と稱する

もの必ず節付好きか拍子好きか文句良きか卓越せる處ありて今尙存す、然れども近時新曲と稱するものは彼手此手を取り集めたる混合種にして、聽て面白く感ずるものあるも、薩摩汁の馳走に均しかる可し、特に酷しきは西洋日本混合音樂の流行するに至ては我邦樂の特有性の存在を危惧せざるを得ず。

古哲並に名將の體格に就て

文明の推移は、事物の變遷を伴ふは免る可からざるの現象にして、總ての生物に於ても、太古に存在せしもの、例之は「マンモス」「ブロントソーリス」大蜥蜴等の類は今日全く消滅し、又今日存在せるもの、往古に無きが如く一大變轉を來せるは、文明の進化が興味多き問題なり。

人類の軀幹も、往古は偉大なりしは、種々の立證に由て明かなる處にして、殊に古哲大聖の體軀身長の大なるは、洋の東西、國の南北を問はず、文碑遺物等に存すを以て知るべし。此の意味に於て、文獻と實地の調査に於て、先づ古哲の内、「サルグールタ、シユタールタ、」(釋迦)の體格、即ち三十二相なるもの、無量義經德行品中に記載せる所を述べれば左の如し。元來「シユツタ」はネパール人にして、「アリアン」人種なるを以て歐羅巴人と其の體格形貌を同ふす。

1、丈六、身長一丈六尺(周の尺なるを以て一尺は八寸の割)(一丈二尺八寸)

2。紫金、紫摩黃金、即ち紫金色

3、方整、體正しく等ふして、圓く備る意
4、毫相月旋、眉間に白毫を生じ、毫光を放ち、右に旋廻し、三日月狀をなす故に月旋と云ふ

5、頂日光、頂圓くして光あり、日光に喩ふ

6、旋髮紺青、頭髮皆な右旋廻す、之れを螺髮と云ふ

7、肉髻、頂上に赤色の肉魂あり、恰も結髻せる如し

8、丹華、口唇紅色を帯び花の如し

9、阿雪、齒牙皓白

10、額廣面門、額廣大にして、口亦大なり

11、滿字師子臆、胸部に梵字の卍形あり(毛?)

12、千幅、手足柔軟にして、手足の裏面に各輪の紋理あり、其紋輪の數千を算するが故に之れを千幅の輪と云ふ

13、合幔又網幔、腋窩の前後の肉襞及指掌の指岐に蹠の如く網幔の紋理あり、

14、陰馬藏、馬の陰莖の如く平時外皮に藏れ收縮して包莖狀をなす、佛の勢峰常に斯の如く陰藏す、之れ不用性陰萎か

15、骨膊長く、肘亦た修し、指纖長く皮膚細軟、而して互に連絡して鎖の如し

16、鹿膊脹、膊肘修長にして指尖膝下に達し、恰も鹿の腸の如し、脹は腸に同じ、而して鹿は食物を攝收して飽食せず、故に腹部膨滿することなし

17、眼、淨眼明鏡の如し

18 鼻、は直くして高く、孔を見ず

19、眉、形新月の如く、紺琉璃色を呈す

20、耳、耳輪垂成

21、膝、骨堅著にして圓好

22、膚、表裏映徹にして淨く垢なし、濁水に染まず、又た塵埃を受けず

- 23、爪、赤銅色にして薄く細澤なり
- 24、臍、出でず
- 25、腹、細腹にして現出せず
- 26、舌、色赤くして薄し
- 27、頭、摩陀那果の如し
- 28、身、自持して透迤ならず
- 29、歩、足地を距ること四寸にして印文現る
- 30、廻身、一時に身を廻ること象王の如し
- 31、梵音、音聲雷の如く、響に八種ありて、微妙清淨深遠なり
- 32、香氣、毛孔口より芳香を放つ

如斯き體相は、今日に於て考察すれば畸形と稱す可きならん、是れ記載に因る、佛祖の體格にして、耶蘇も體格身長なりと傳ふ。又荀子の非相篇を見るに、人の形狀を見

て其の吉凶妖祥善惡を知る云々と云ふも、形ちを相するは心を論ずるに如かず心を論ずるは術（道術）を擇ぶに如かず、故に形ちを以て善惡是非を批評す可きにあらずと其例證に

堯は長く、舜は短く、文王は長く、周公は短く、仲尼は長く、仲弓は短く、昔衛靈公の臣公孫呂は身長七尺、面の長さ三尺、額の廣さ三寸、眼、鼻、耳、口、皆具つて名、天下を動かし、葉公子高は、微小短瘠にして、楚と戦ひ勝ち、仁義功名を著し、桀紂は長巨にして、身體美ならず、越勁、（膂力人に超ゆ）然れども身死國亡。

以上荀子の論法によれば、體非認なれども、傑出せる人の體軀の偉大なるは明かなり我邦に於ても傳教、弘法、親鸞、日蓮の偉大なる、又名將豪傑に比較的體軀の大なる人多く、中には荀子の筆鋒の如く秀吉の如き小身の人もあるべしと雖も、概して長大なりと謂ふ可く、戦國時代の武人に、七尺位の者は多々ありしなり、是等は醫學上心理學上より考へて、食物の關係か、攝生か、周圍の事情か、精神修養か、遺傳か、其

の研究を重ねるは興味ある問題なりと信ず。

近時統計の示す處に依れば、都人種は身長を益し、胸は狭く、地方農民は之れに反し身長短縮、胸圍擴大の統計を示すと謂ふ。

我邦名將の體格に就て

鎧具足、日常の用器、及記載等を調査し、又た一方其の死の疾病より、其の體格も推測するを得可し、道眞の尿毒症、時平の肺病、重盛の肺病、時政及尊氏の癱、謙信の卒中元就の癌、家康の腸「カタル」ナポレオンの胃癌。フリードリヒの喉頭癌、幾多の病症を擧ぐれば限りなし。

余は先づ徳川氏歴代及其の重臣の體格に就て、聊か實測調査せる處を述べ、其の實查報告を爲す、其の方法左の如し。但し小細の記録は震火に消失せるも大要を披露す。久能山徳川氏寶庫に赴き、卷尺を以て歴代の各鎧の胸廻り、甲手脛當、靴、佩刀及日

常用器、殊に食器等を計測す。徳川家には鎧師ありて、各其尺寸を計り調製せるものにして（吾人が柳原で古服を間に合すとは異なる）又た嚴密の意義より申せば、飾り鎧具足と、實用具足とは、多少は差違はあるべし、のみならず其の衣服の寸尺に就ても計測するものなり。

偉大體格、家光（六尺）綱吉、吉宗

短大肥滿、家康、家齊、家達

中肉中脊、家慶（十二代）慶喜

貧弱、以上將軍の外

又關ヶ原戦前に誓約の爲めか、又たは體格比較の爲なるかは識らず、紙面に手形を印せる諸將の遺物が額として掲げあり。

最も大なるは加藤清正の二五糎位を始とし、次で、本多忠勝、酒井忠次、大須賀康高等の順にして、井伊直政の比較的細小なるは武力の將と謂んより寧ろ智將たるを思は

科學と藝術

三二二

しむ。榊原康政の中等大の手形等此の手形を標準として身長を計測するを得可し

享文文藝集 (了)

昭和十三年六月九日 印刷
昭和十三年六月十二日 發行

享文文藝集 非賣品

無斷上映及
掲載ヲ禁ズ



著作者兼
發行者 土 生 敦
東京市日本橋區人形町三丁目二番地

印刷者 濱 田 精 彦
東京市神田區東福田町三番地

印刷所 濱 田 印 刷
東京市神田區東福田町三番地

發行所

東京市神田區神保町
電話九段(33)二三一〇番
振替東京二二六九一番

山海堂出版部

